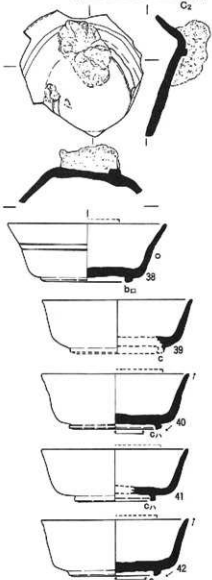
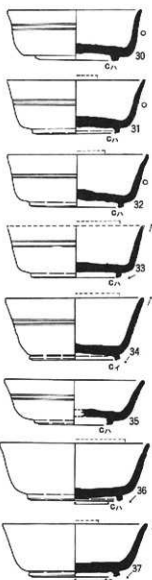
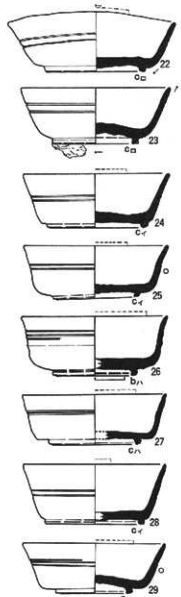
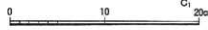
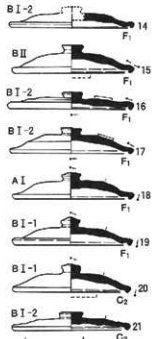
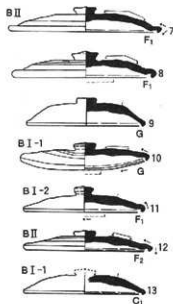
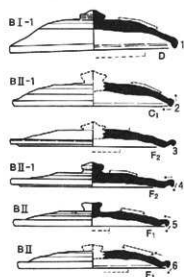
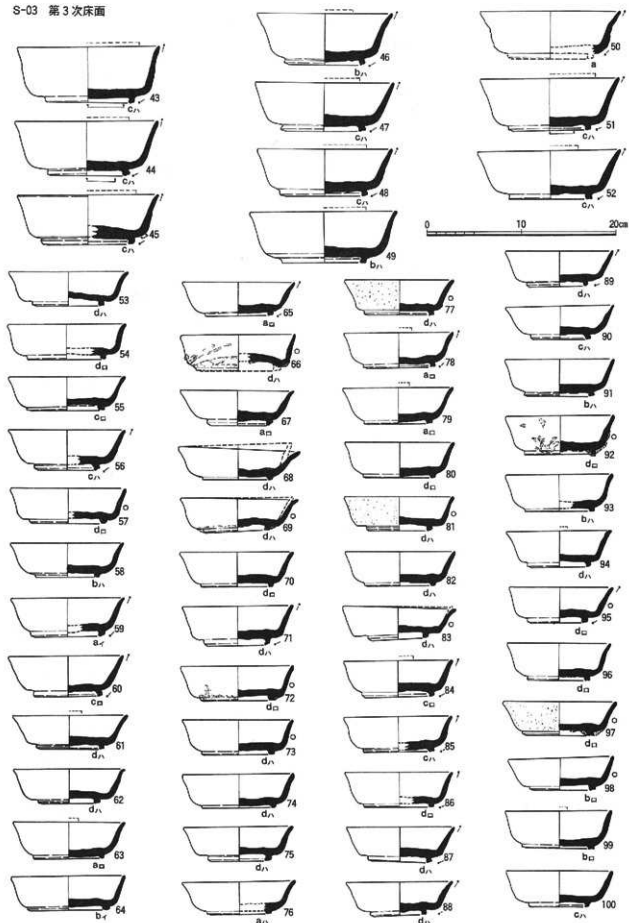


S-03 第3次床面



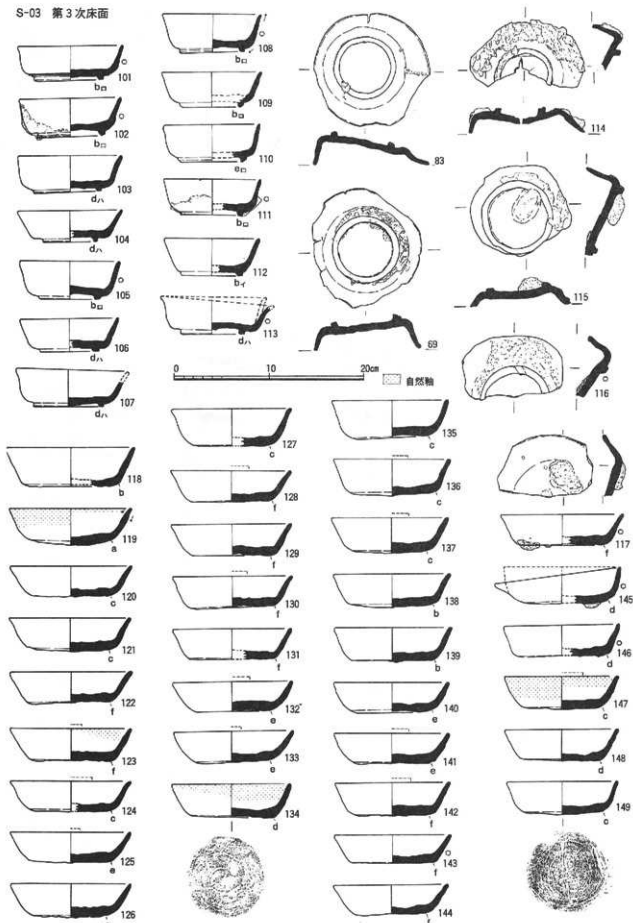
第147图 XV地区 S-03第3次床面出土遺物 (1/4) ○2次烧成品 (烧台)

S-03 第3次床面



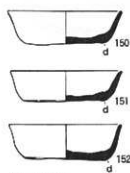
第148图 XV地区 S-03第3次床面出土遗物 (1/4) ○2次烧成品 (烧台)

S-03 第3次床面

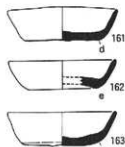
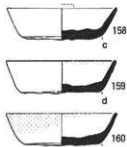
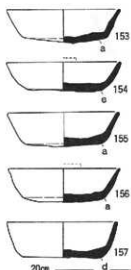


第149图 XV地区 S-03第3次床面出土遗物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

S-03 第3次床面

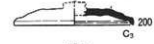
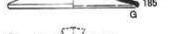


自然釉



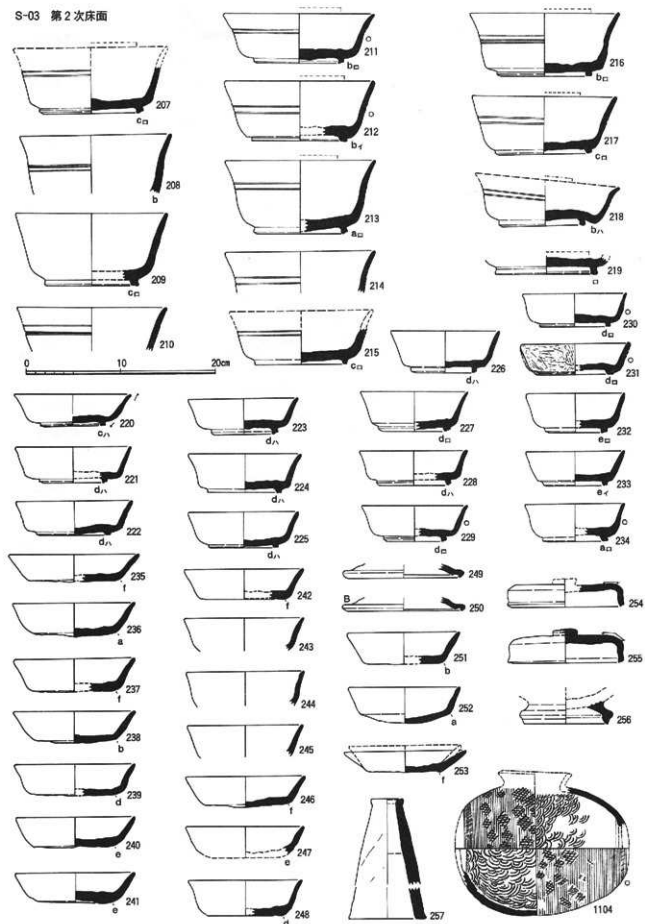
S-03 第2次床面

0 10 20cm



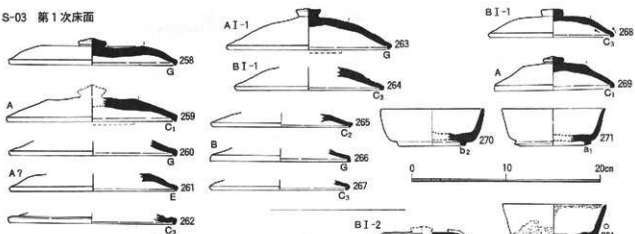
第150图 XV地区 S-03第3·2次床面出土遗物 (1/4) ○2次烧成品 (烧台)

S-03 第2次床面

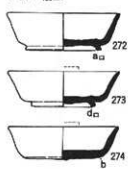


第151图 XV地区 S-03第2次床面出土遗物 (1/4, 1104:1/6) ○2次烧成品 (烧台)

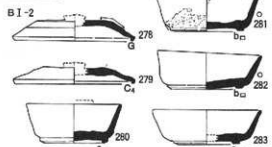
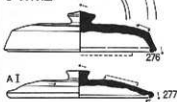
S-03 第1次床面



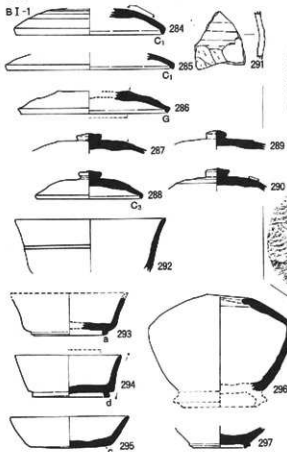
S-03 覆土



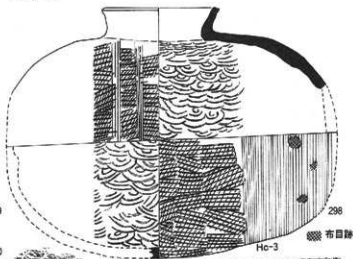
S-03附近



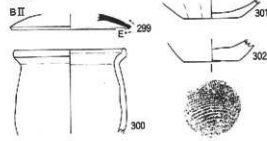
S-01



S-02 横

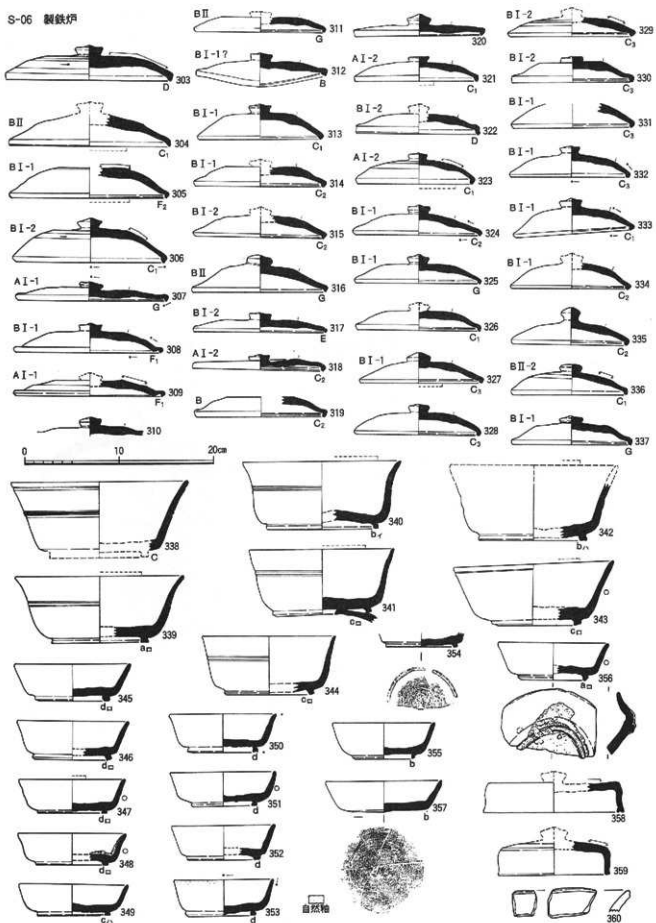


S-02



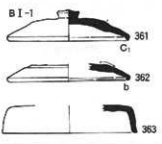
第152図 XV地区 S-03第1次床面・覆土・付近、S-01、S-02横出土遺物 (1/4) ○2次焼成品 (焼台)

S-06 製鉄炉

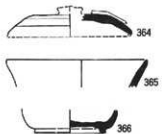


第153図 XV地区 S-06製鉄炉出土遺物 (1/4) ○ 2次焼成品 (烧台)

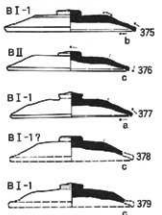
S-06 上面



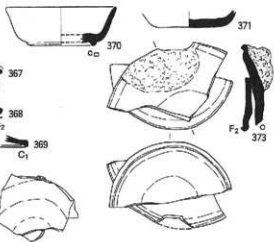
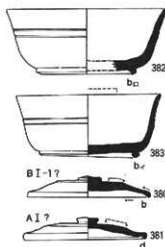
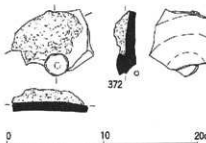
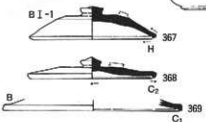
SK08



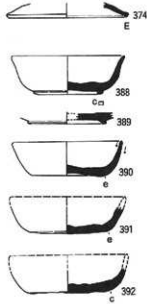
SK12



SK10



SK11



第154図 XV地区 S-06上面、SK08・10~12出土遺物(1/4) ○2次焼成品(焼台)

表72 杯蓋I種軸跡による杯I種口径と高台直徑(重ね焼きB種)

單位: cm

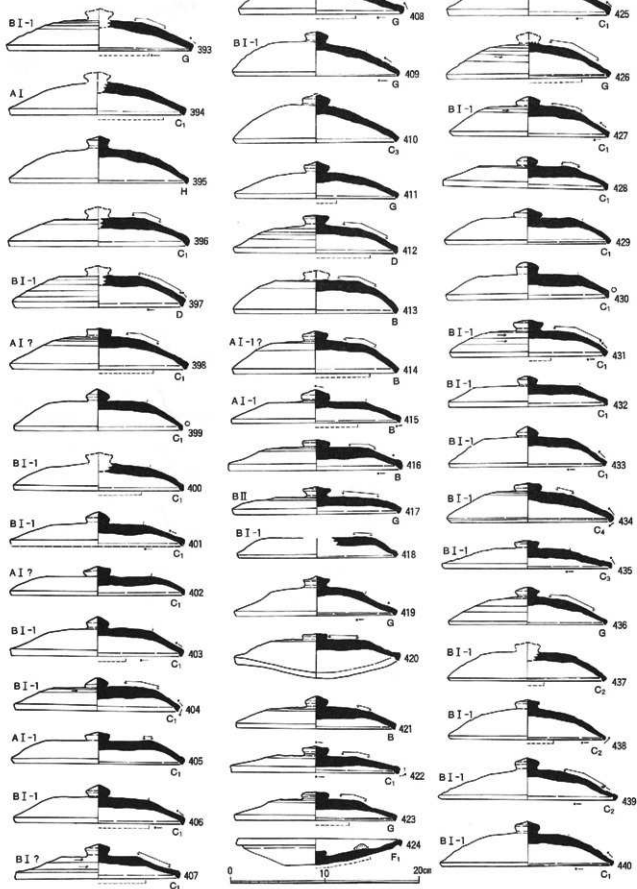
No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径	No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径	No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径	No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径
1	17.5	15.3	2.2	(7.2)	404	17.2	15.4	1.8	9.6	427	16.4	15.0	1.4		450	18.8	18.1	0.7	
306	15.6	14.2	1.4		406	17.6	16.1	1.5	9.6	431	16.4	15.3	1.1	10.0	453	16.8	16.3	0.5	8.5
308	15.4	14.7	0.7	8.2	408	17.0	16.1	0.9	9.7	432	16.4	14.2	2.2	7.9	459	19.4	17.3	2.1	
383	19.0	17.2	1.8	8.0	409	17.1	15.7	1.4	(9.5)	434	16.8	16.2	0.6	(10.0)	470	16.9	15.1	1.8	11.0
400	17.7	16.8	0.9	10.8	419	16.9	16.0	0.9	9.3	438	16.4	15.6	0.8	9.7	473	15.6	14.4	1.2	
403	18.0	15.6	2.4	9.3	425	17.0	(16.0)	1.0	10.0	439	18.4	15.8	2.6	9.4	477	15.2	14.8	0.4	9.4

表73 杯蓋I種軸跡による杯I種口径と高台直徑(重ね焼きB種)

單位: cm

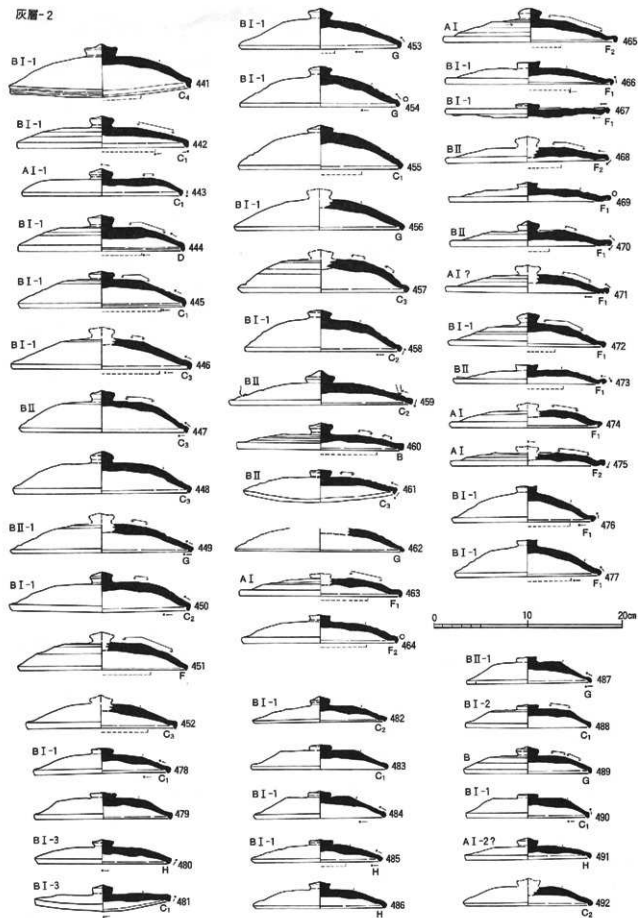
No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径	No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径	No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径	No	蓋口径	杯口径	口径差	高台径
11	12.6	11.3	1.3		324	13.3	11.0	2.3	7.5	576	12.8	12.2	0.6	6.8	679	12.6	11.5	1.1	8.2
12	13.0	12.0	1.0		327	13.0	11.4	1.6	7.2	587	13.7	12.3	1.4	7.8	704	12.8	12.2	0.6	7.8
13	12.5	11.1	1.4	7.9	330	13.5	11.5	2.0	8.2	591	13.4	12.6	0.8	8.0	725	14.0	11.7	2.3	10.0
15	12.4	11.8	0.6		332	12.4	11.2	1.2	7.5	596	13.2	12.2	1.0	7.8	729	13.0	11.7	1.3	8.6
16	13.0	11.8	1.2		333	12.4	11.5	0.9	8.5	600	13.1	12.4	0.7	10.2	731	12.5	11.5	1.0	8.2
17	12.6	12.0	0.6		375	13.6	12.2	1.4	(8.0)	635	12.8	11.5	1.3	8.2	733	12.3	12.0	0.3	8.6
19	12.2	11.3	0.9	(7.4)	377	12.4	11.7	0.7	8.8	642	12.3	11.1	1.2	7.9	735	12.2	11.0	1.2	9.0
20	12.0	11.2	0.8	9.1	482	13.9	12.4	1.5	7.5	648	11.7	11.7	0	7.2	736	12.2	10.8	1.4	7.5
198	12.8	11.8	1.0		485	13.4	12.5	0.9	9.1	655	12.8	12.1	0.7	7.5	741	12.8	11.7	1.1	7.3
268	13.0	11.9	1.1		487	13.2	12.0	1.2	7.1	666	13.2	11.6	1.6	9.3	744	10.3	9.9	0.4	?
314	13.6	11.3	2.3	(6.5)	505	12.8	11.7	1.1	7.5	673	12.8	11.6	1.2	8.5	747	11.2	10.7	0.5	11.0

灰層-1



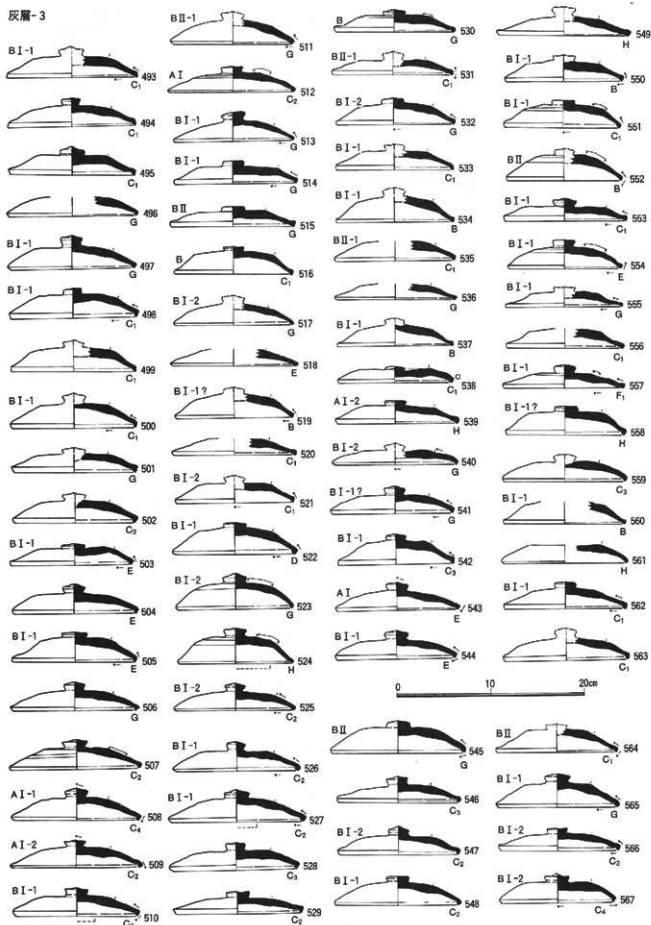
第155圖 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次燒成品 (燒台)

灰層-2



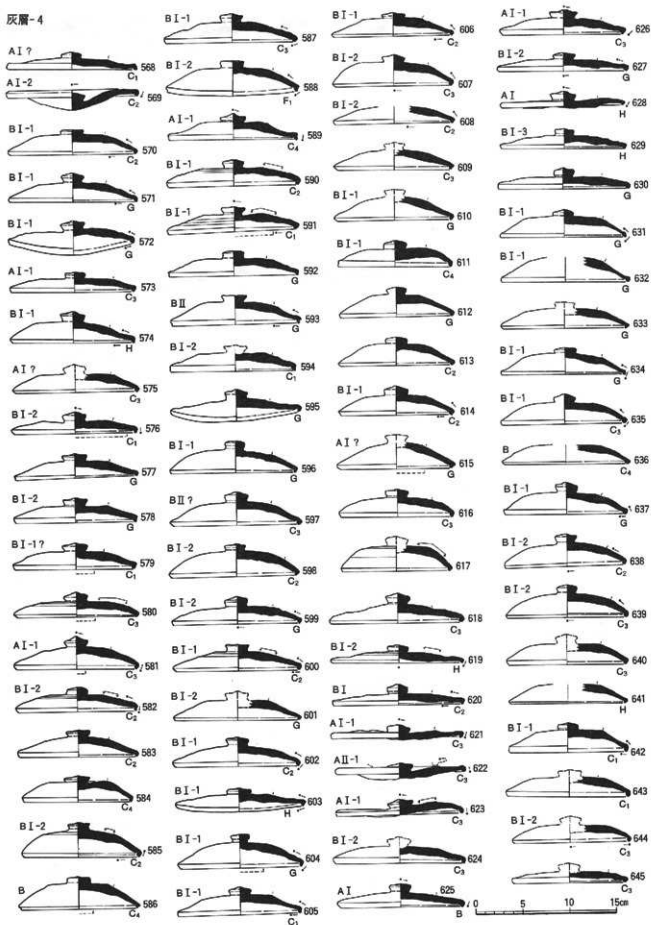
第156图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○2次烧成品 (烧台)

灰層-3



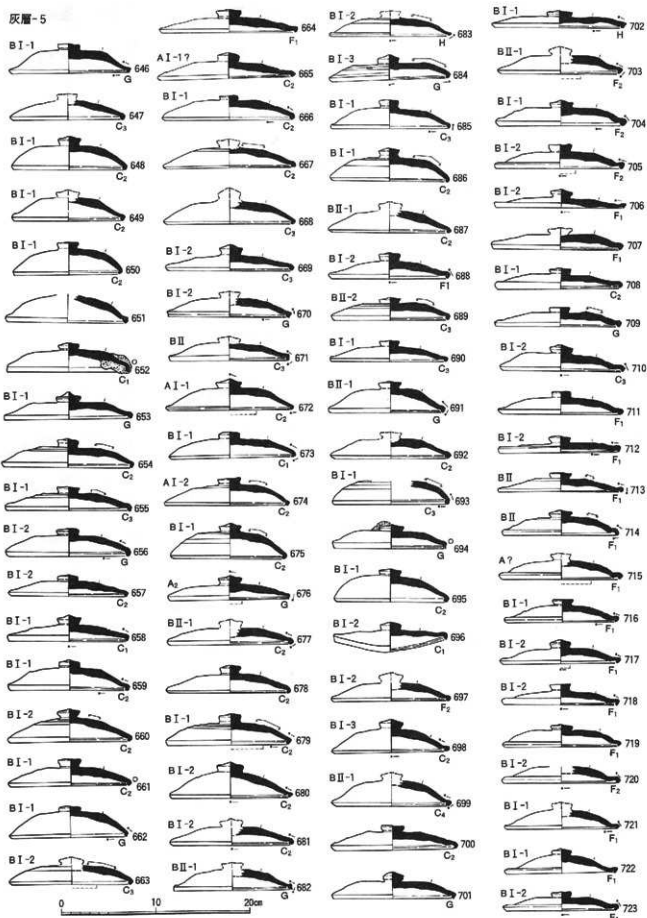
第157图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-4



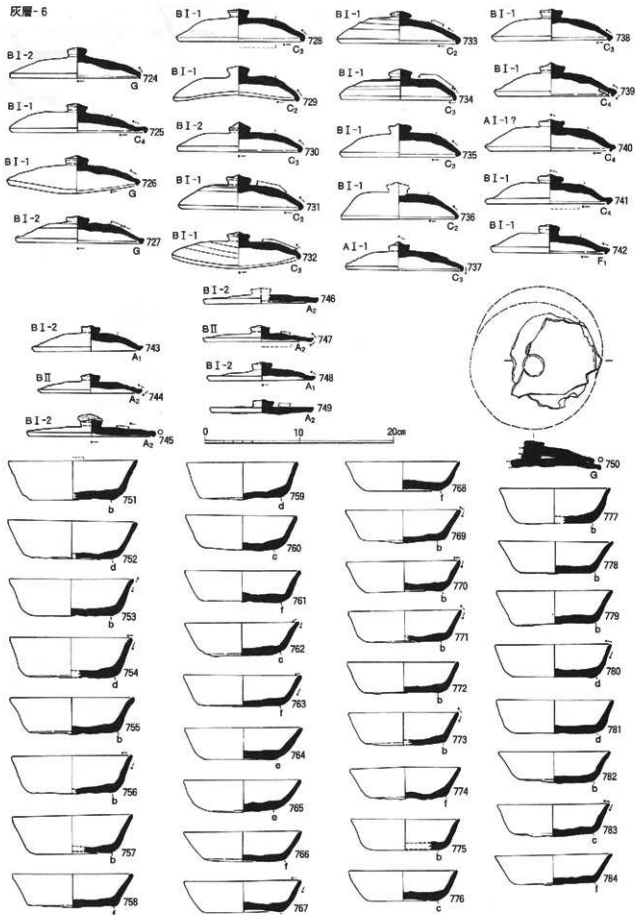
第158图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4)

灰層-5



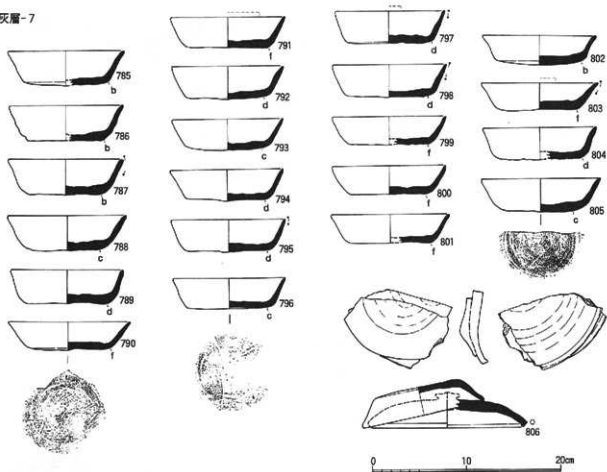
第159图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-6



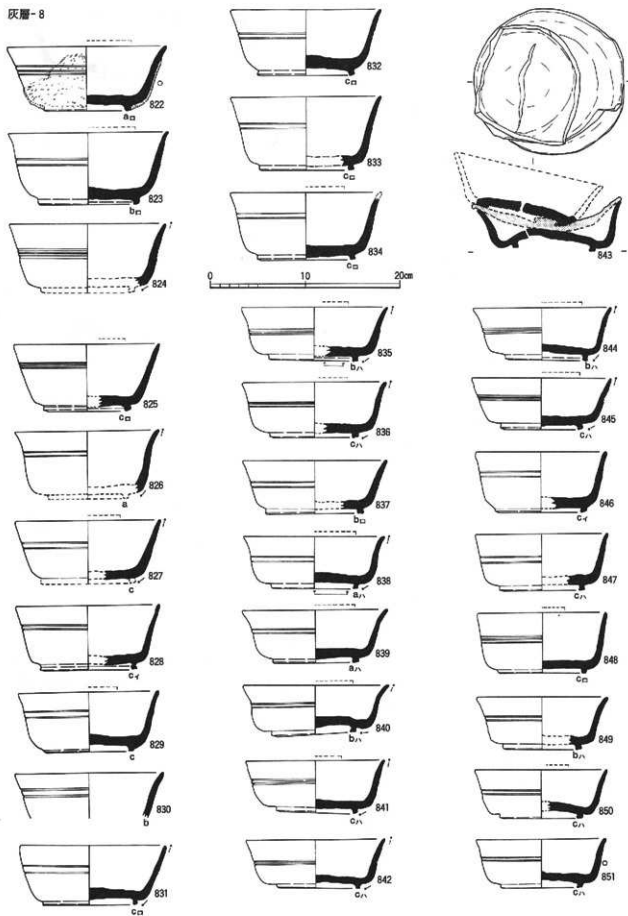
第160图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次燒成品 (燒台)

灰層-7



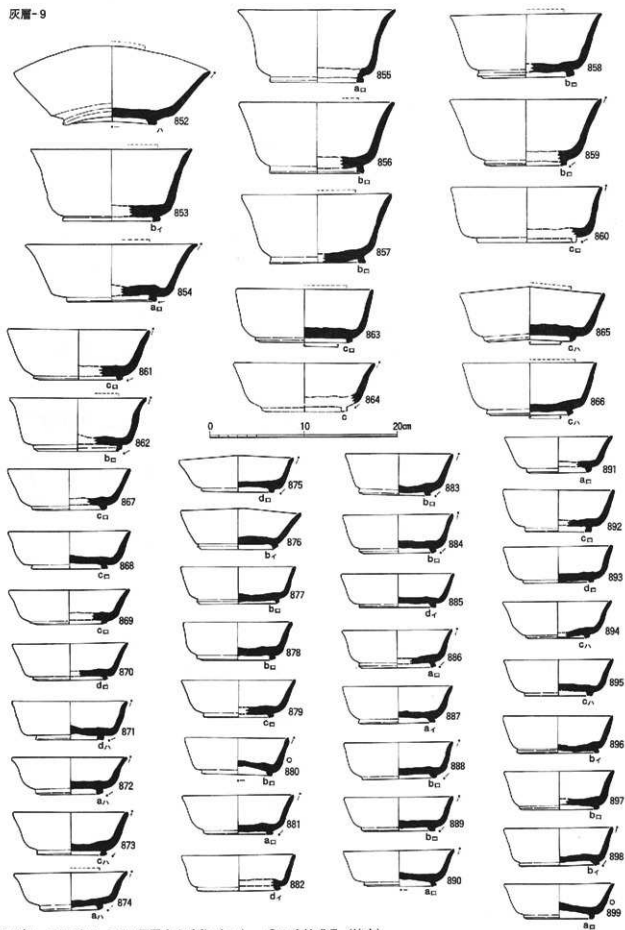
第161图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-8



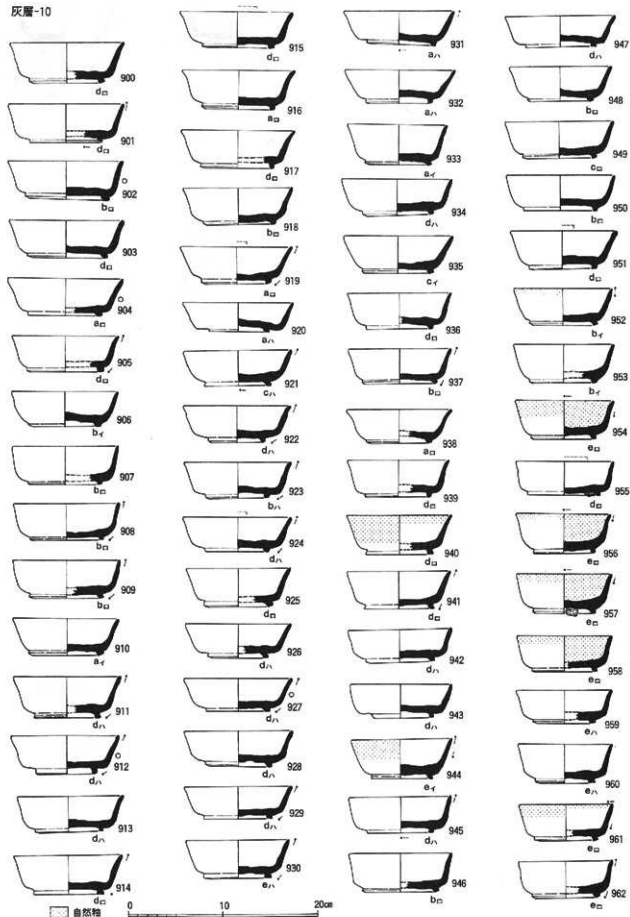
第162圖 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○2次燒成品(燒台)

灰層-9



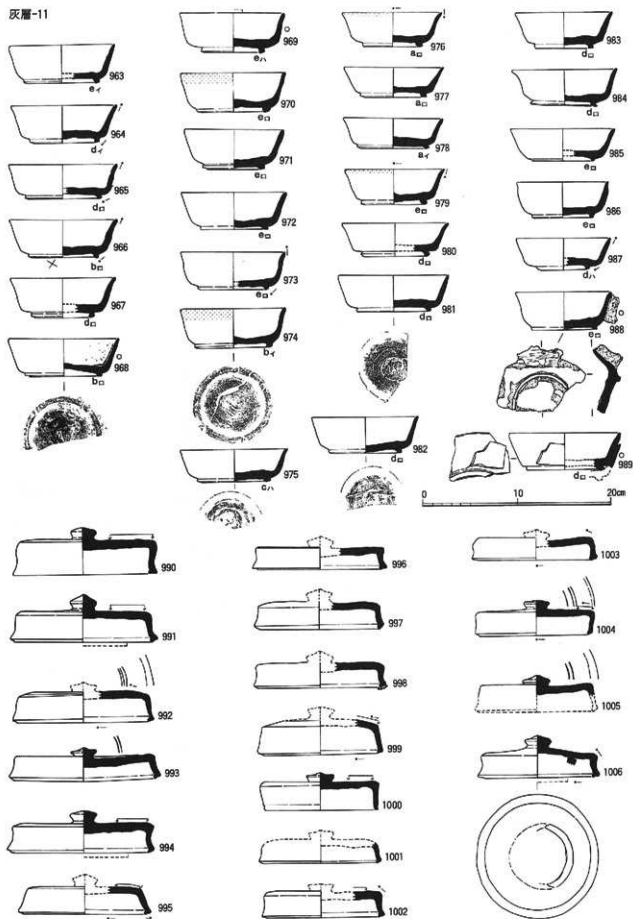
第163图 XV地区 S-3灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-10



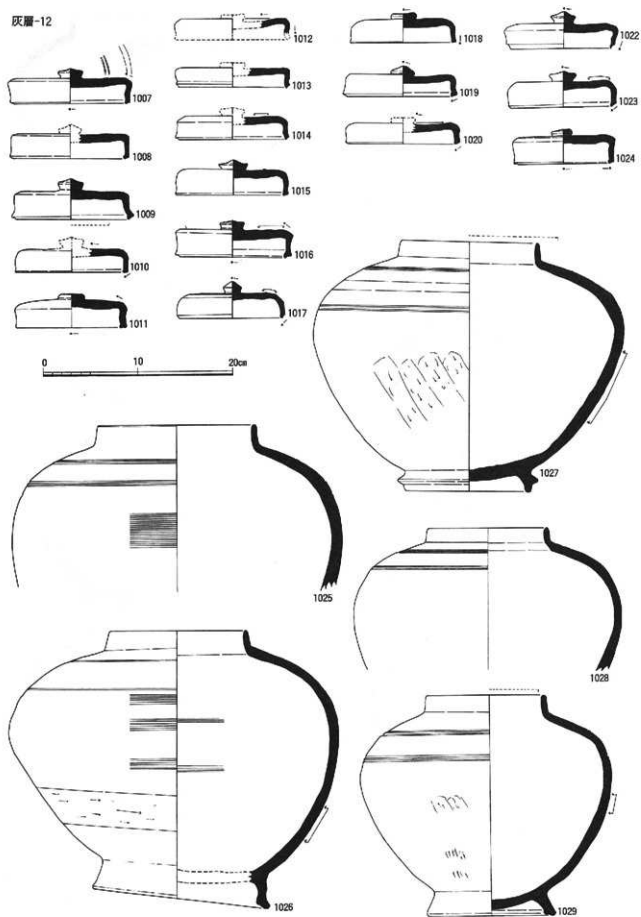
第164图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-11

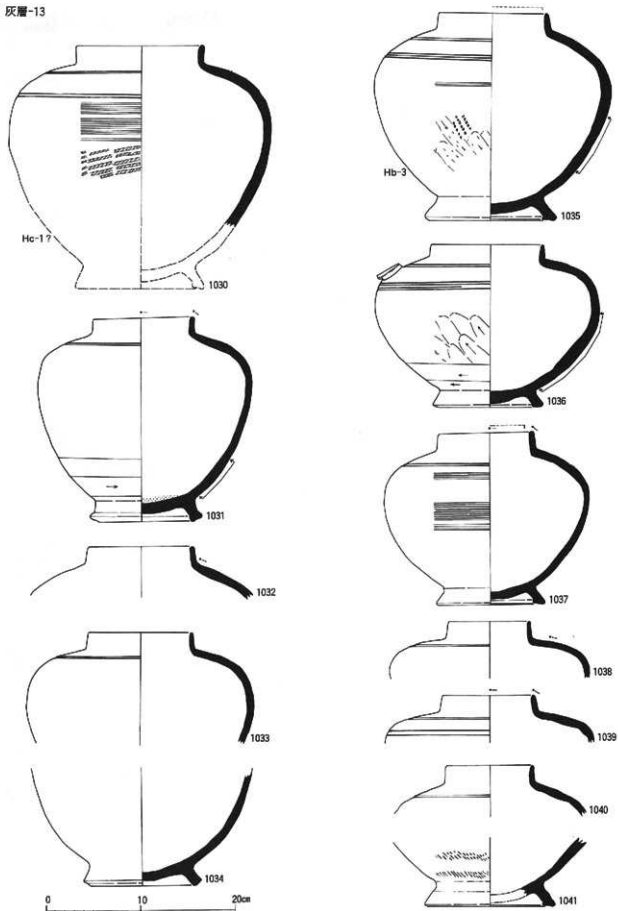


第165图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4) ○2次烧成品(烧台)

灰層-12

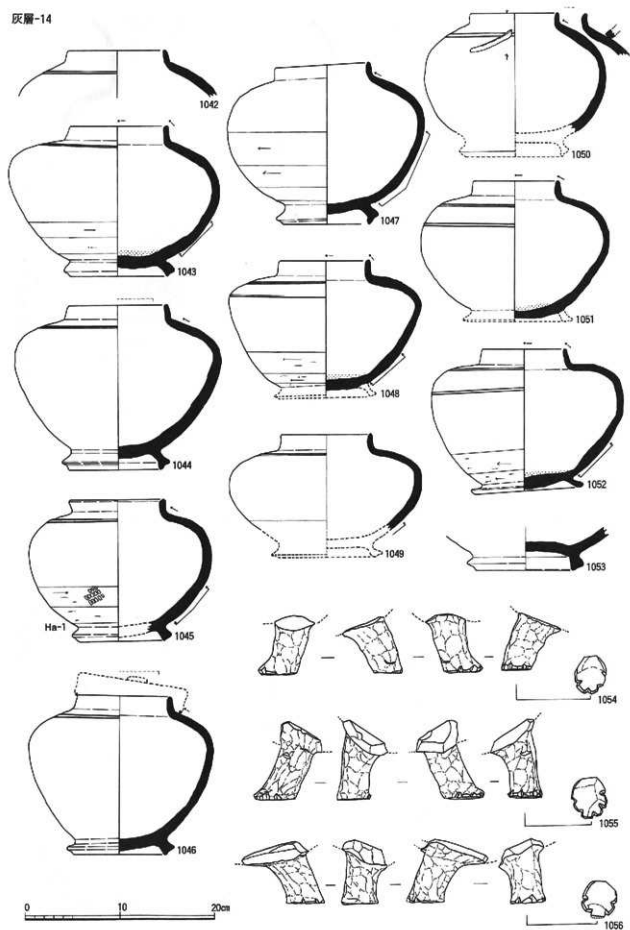


第166图 XV地区 S-3灰層出土遺物 (1/4)



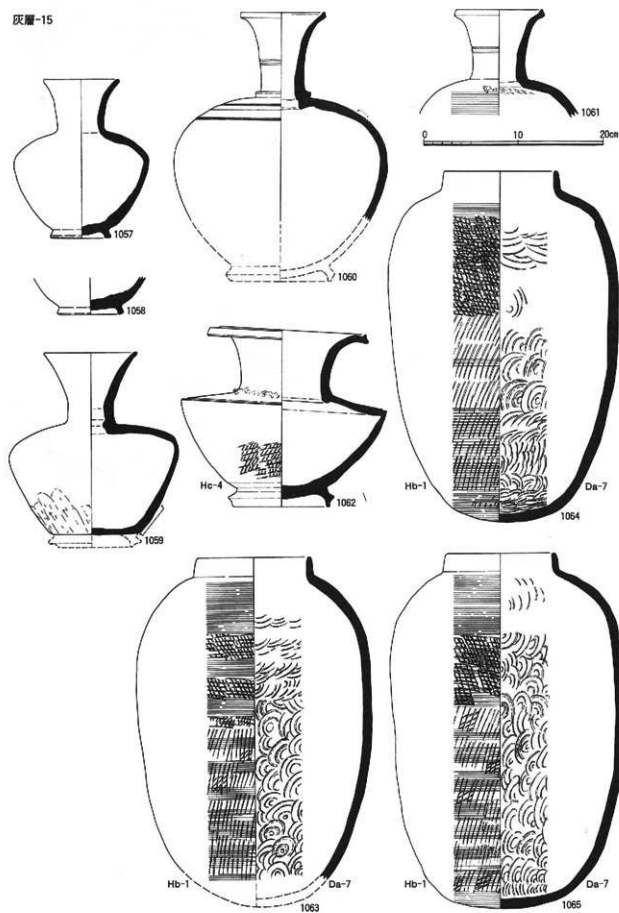
第167图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

灰層-14

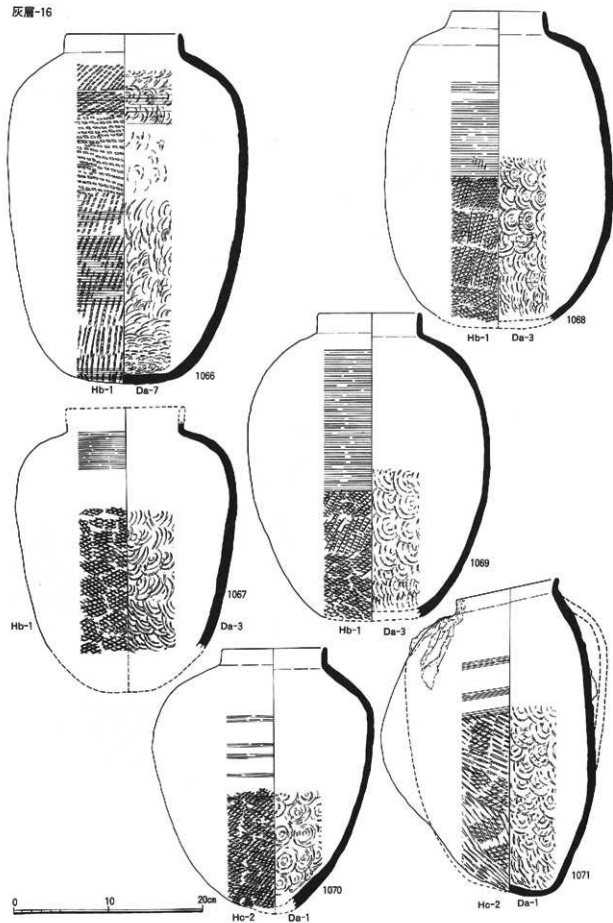


第168图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

灰層-15

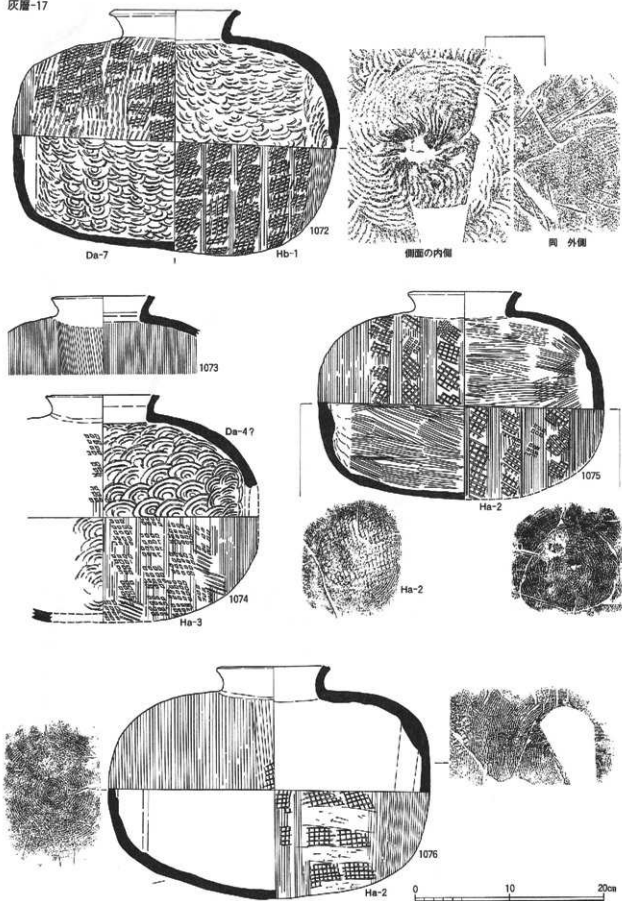


第169图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4)



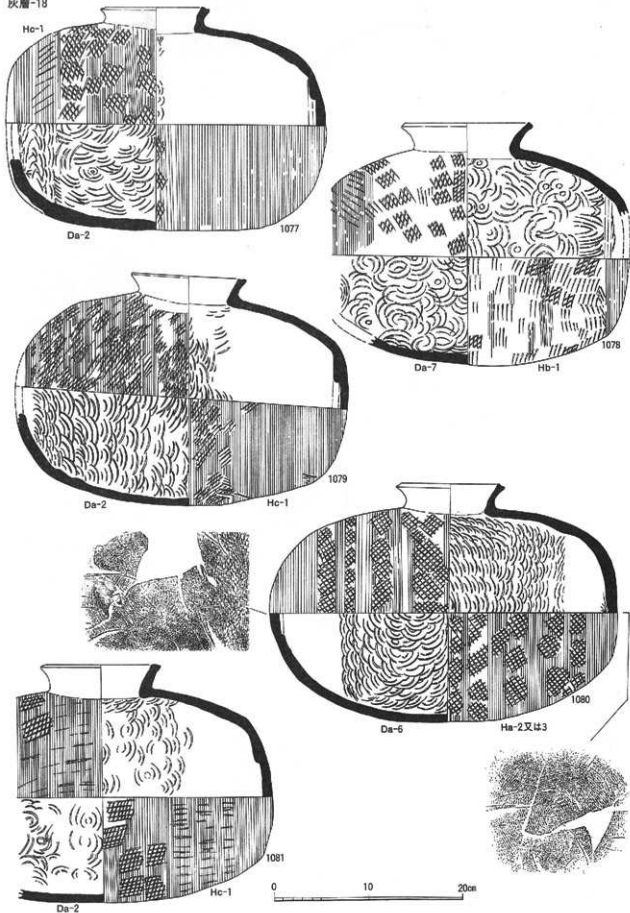
第170图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

灰層-17



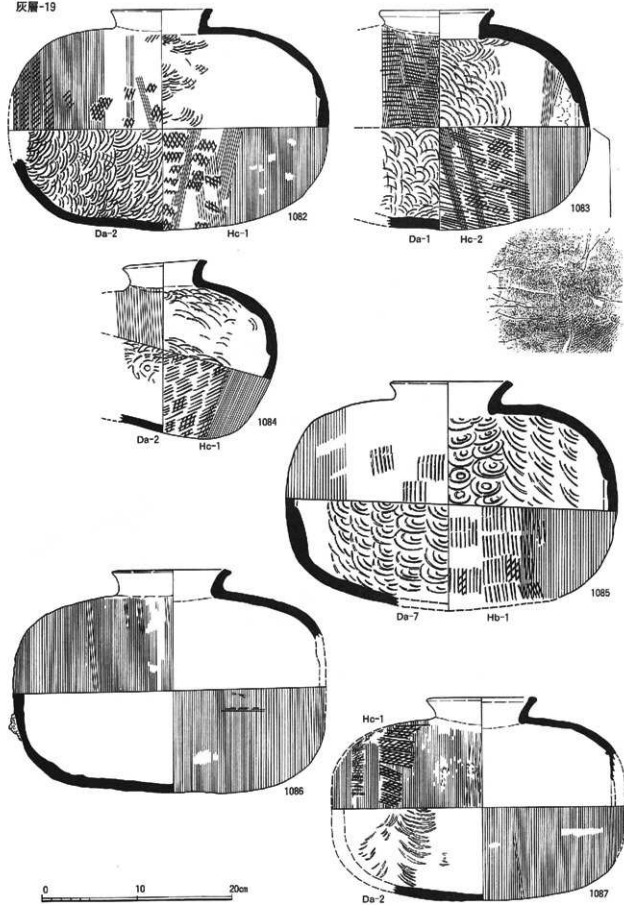
第171図 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

灰層-18



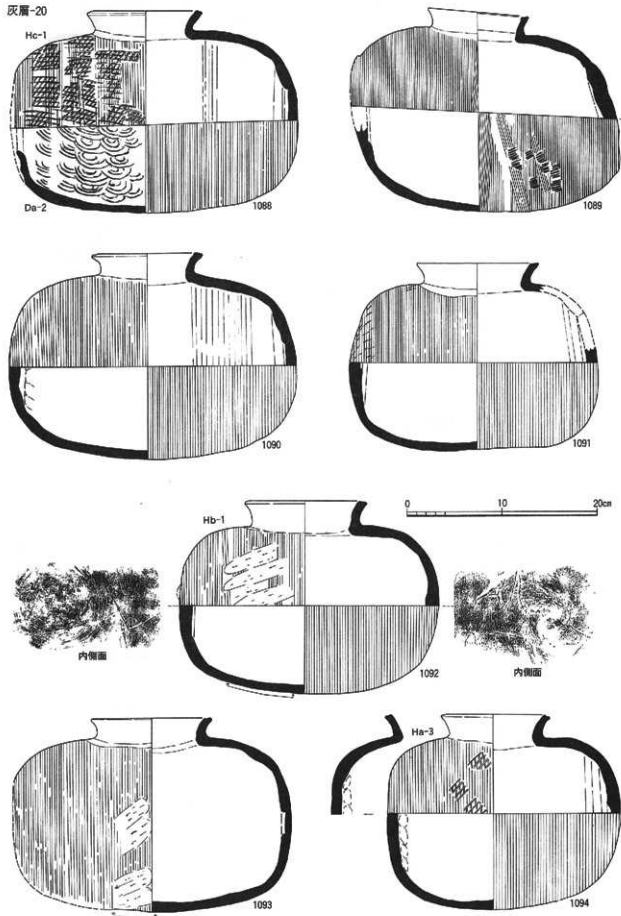
第172图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

灰層-19



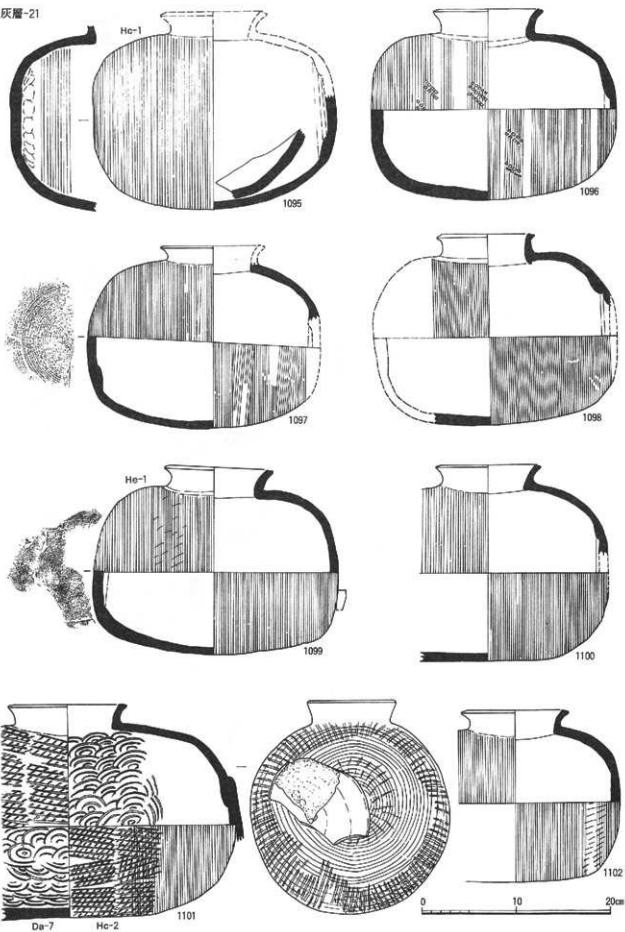
第173图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

灰層-20

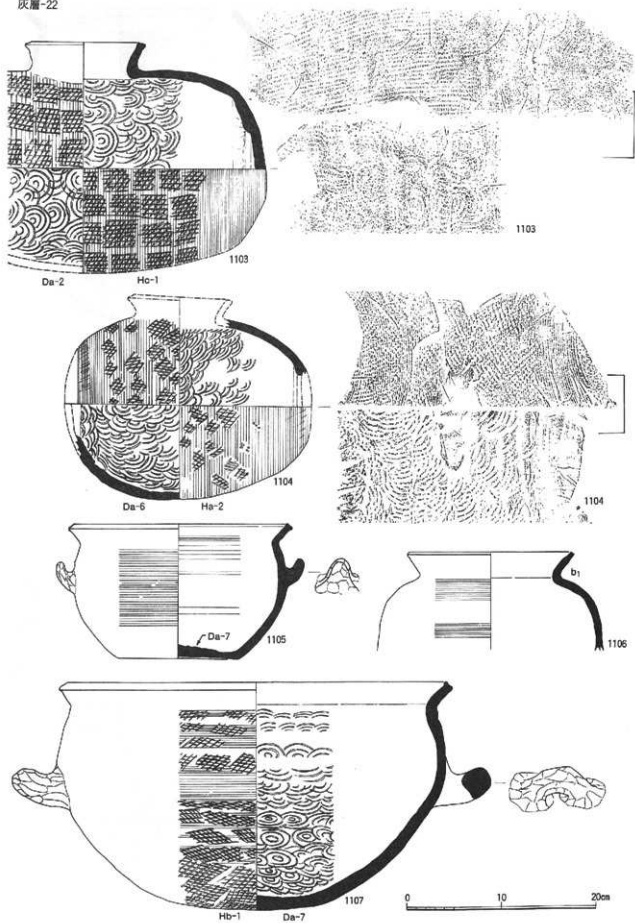


第174图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4)

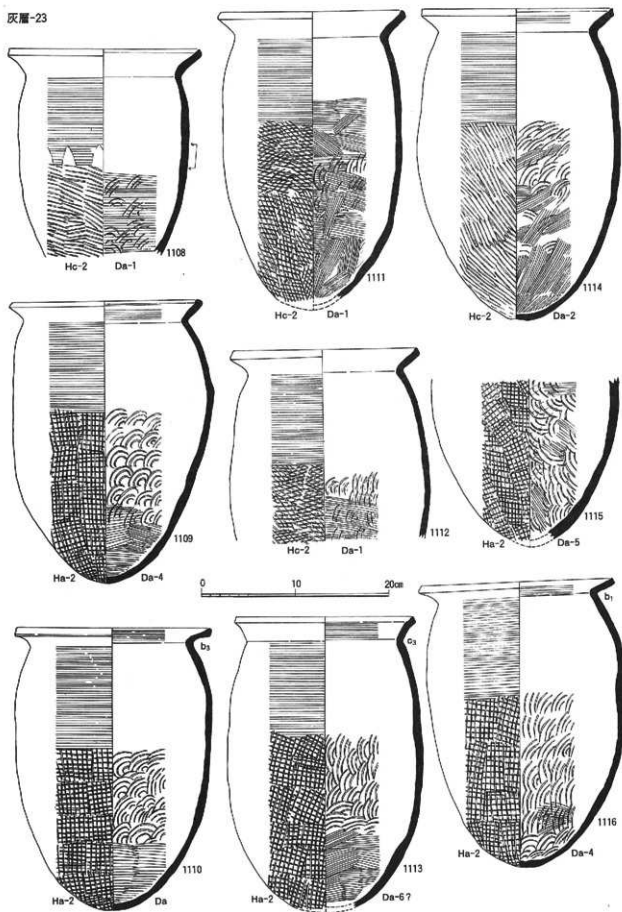
灰層-21



第175图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4)

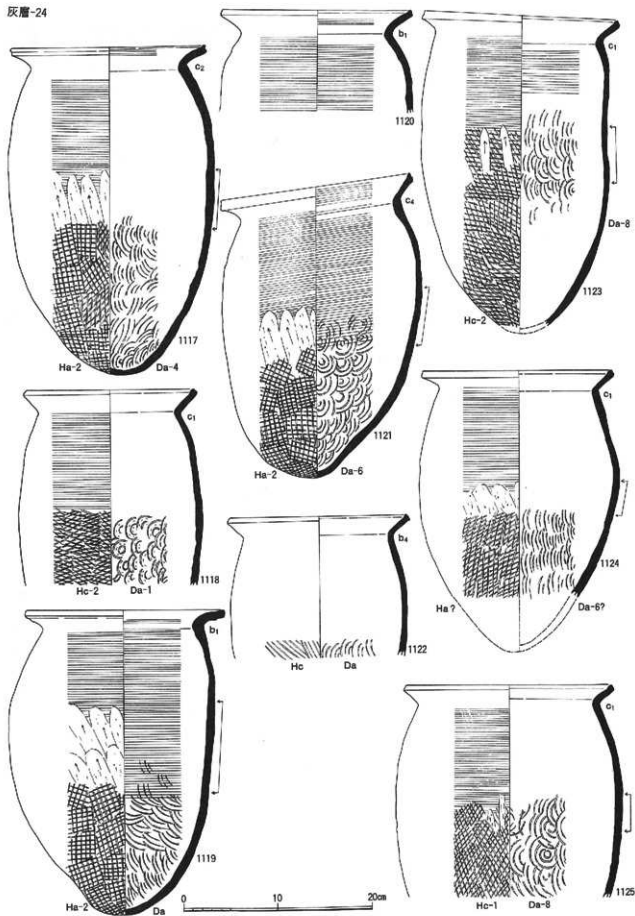


第176图 X V地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

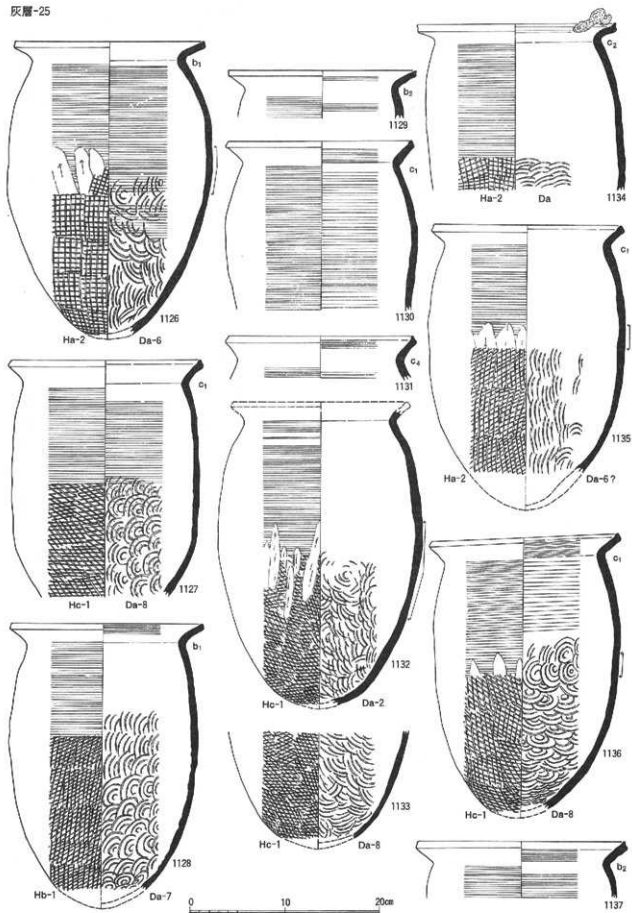


第177图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

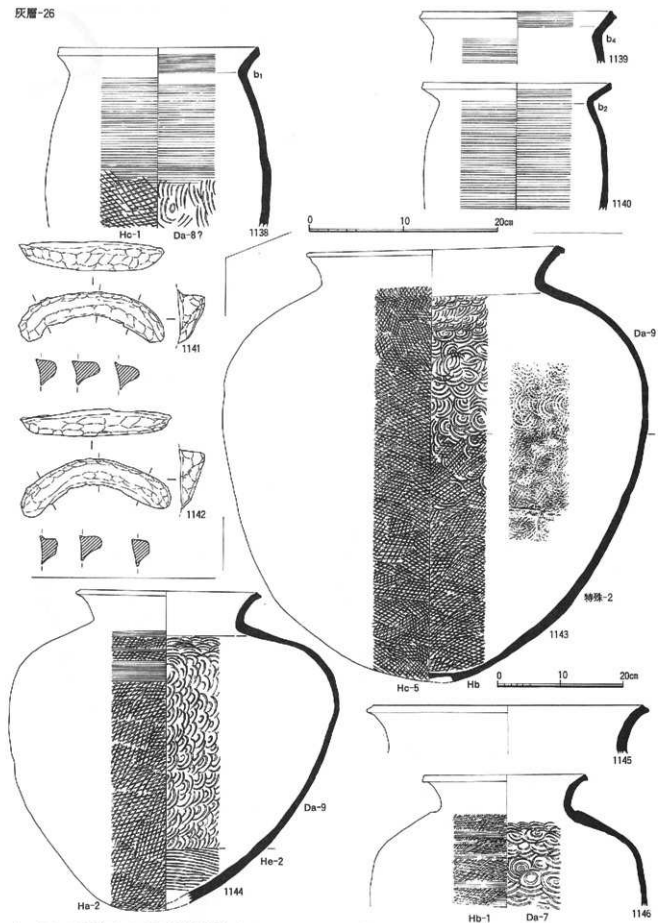
灰層-24



第178图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

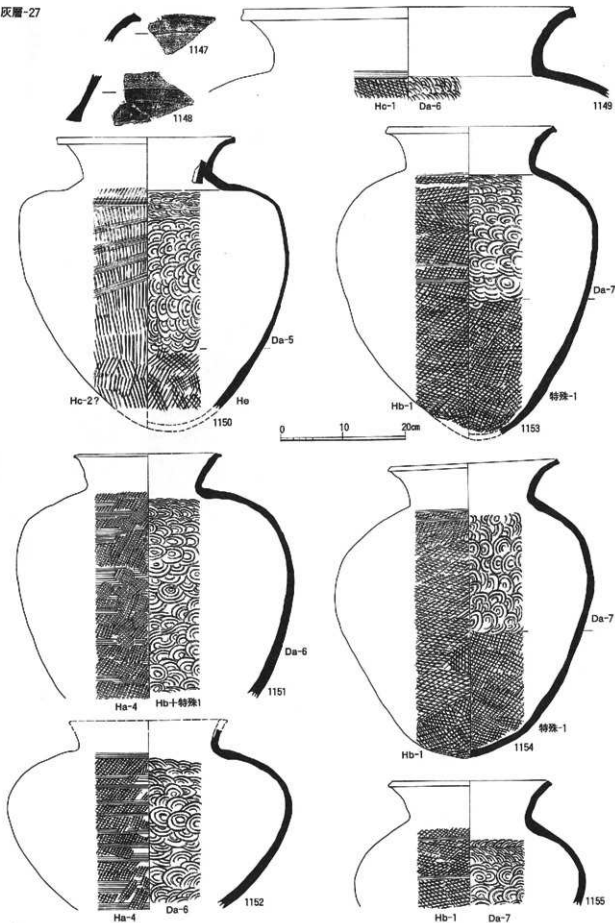


第179图 XV地区 S-03灰層出土遺物 (1/4)

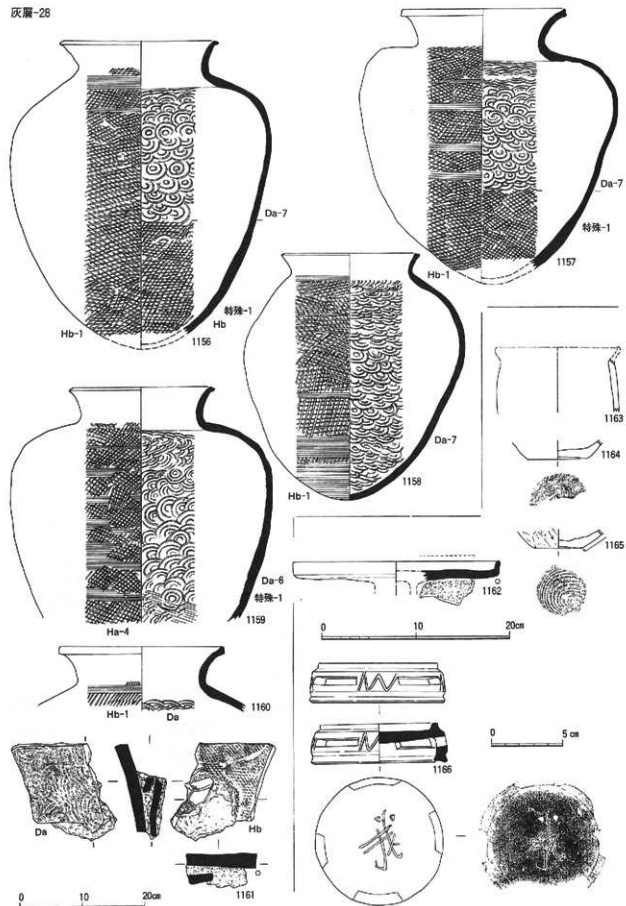


第180图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4, 1143~1146: 1/6)

灰层-27



第181图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/6)



第182图 XV地区 S-03灰层出土遗物 (1/4, 1156~1161: 1/3, 1166: 2/3) ○2次烧成品(烧台)

5 赤坂C遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂

(1) 立地 (第43図・図版第27)

赤坂C遺跡は、東側を小柳谷に西側を締打池と恩坊池に囲まれた標高60～90m、南北1km、幅550mの丘陵の谷間に位置し、19地区（I～XIX地区）の遺跡を総称している。この丘陵中を南北に奥行き800m、谷頭幅60m、幅30～50mの細長く幅狭い谷が貫入する。遺跡は谷尻・谷間・小規模な支谷の標高40～60mの南北緩斜面に立地し、製鉄炉・炭焼窯・須恵器窯などが密集して検出された。

Ⅱ地区は谷頭より550mに位置し、標高55mの南緩斜面に立地する。赤坂C遺跡V地区とは谷を挟んで対峙する。

(2) 遺構と遺物 遺構は穴1で、遺物は出土していない。

(3) 穴

SK01 (第183図)

標高55mの緩く湾曲する南緩斜面に立地する。形態は南側を流失するがほぼ方形を呈する。長軸1.30m、短軸0.70m以上、深さ0.20～0.30mの穴である。床面には炭化物が堆積し、壁及び周囲には被熱の痕跡は見られない。谷に沿って周囲北側15m、南側40mの範囲内に他の遺構は見られない。

6 赤坂C遺跡Ⅲ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂28

(1) 立地 (第183図・図版第27)

Ⅲ地区は谷頭より450m入ったところから、西側に小規模な支谷がさらに入る。その支谷は西と南側に二股状に別れ、Ⅳ地区は西側の谷尻に位置し、標高55m南側の斜面に立地する。

(2) 遺構と遺物 遺構は穴1で、遺物は炭化物が多量に見られる。

(3) 穴

SK01 (第183図)

赤坂C遺跡Ⅱ地区の1号穴と同様の方角を呈すると思われるが、北側は谷川によって流失し全貌は明確でない。長軸を等高線と平行させ、長軸1.80m、短軸0.88m以上、深さ0.20mの穴である。遺構検出面にはわずかに黄褐色土が見られるが大半は炭化物混じりの褐色である。床面には20.10mの炭化物の層が堆積する。被熱の痕跡は見られない。

7 赤坂C遺跡Ⅳ地区

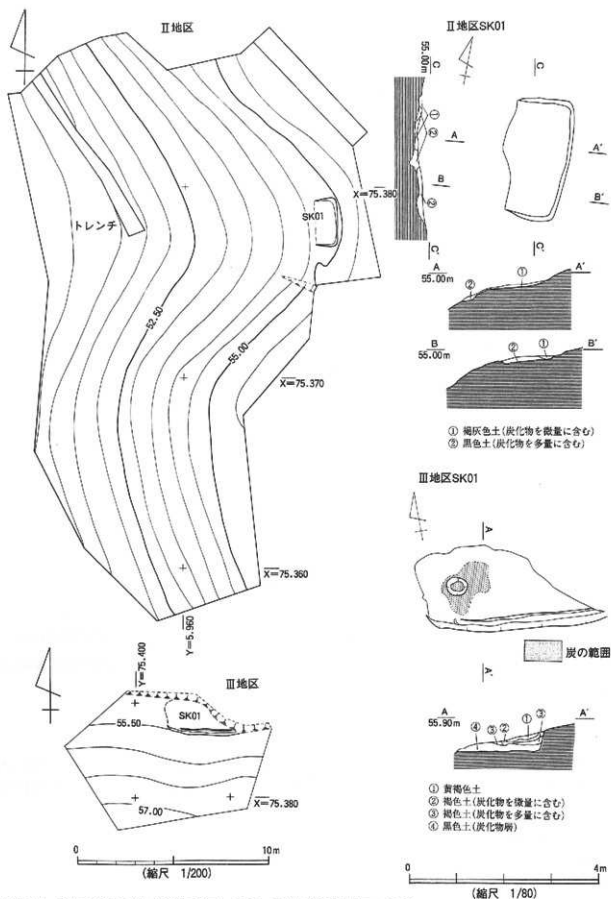
・所在地 小杉町入会地字赤坂28-1

(1) 立地 (第43図)

赤坂C遺跡Ⅲ地区の斜め対面に位置し、北側斜面の標高55～60mに立地する。当初2～3基の炭焼窯とされていたため、範囲は標高63mにまで及んでいた。表土排土の結果、横口式炭焼窯と確認された。谷川より2m上位に長さ20m弱、幅7mの平坦なテラスが見られる。また、周囲の地形は斜面であり炭焼窯の位置する場所のみ平坦となるため、このテラスは人為的に造成されたものと思われる。テラスの前庭部南側は崩落し抉れている。

(2) 遺構と遺物

遺構は横口式炭焼窯1と穴1である。遺物は横口式炭焼窯の南側、黒褐色土中に須恵器杯の口縁部片が出土している。細片のため図示はできなかったが、口縁から体部は直線的に開き、口径差が大きくなることからおおむね9世紀代の所産と考えられる。



第183図 赤坂C遺跡II地区遺構配置図 SK01、III地区遺構配置図 SK01

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第184回・図版第27)

S-01炭焼窯は丘陵北斜面の調査区X75.420-75.430Y-6.060-6.080区に位置し、等高線に平行して築かれた半地下横口式炭焼窯跡である。S-01は谷の落ちきわから2m高い斜面地に長さ20m弱、幅7m以上の平坦部を造り出し、その上に構築されている。なお、平坦部幅については南側が崩落しているため計測はできない。

試掘調査では2-3基の炭焼窯が予想されていたが、横口前庭部の平坦部に厚さ10-20cmの黒褐色土が堆積し、部分的に厚さを増すところから予想されたものと思われる。

竈体は全長5.7m、幅0.6m、床面は奥壁で0.8m、中央で0.6m、焚き口で0.6mである。天井部は崩落して遺存していない。煙出しは楕円形を呈し長さ0.7m、幅0.9mである。煙出しの底部は焼成部床面より10cm低く傾斜をしている。また、煙出し口は天井まで崩落したままで使用され、下部では当初の煙出し口をスサ粘土で補修して使用されたことがわかる。煙出しと奥壁の周辺は煙出しから1.4m、床面から10-20cm上位の範囲が青灰の還元色となる。煙出しの断面は床面の10cm上位から還元色となり、上位になるほど赤色化する。焼成部の幅は遺存の良い奥壁で0.8mを測る。中央部北壁は幅2mにわたり補修され、壁の色は補修部が灰色の還元色から黄または赤の酸化色に変化しているが、床面は帯に黒色を呈する。焼成部の南側(谷側)に4個の掻き出し口が設けられ、焚き口側の2個はわずかに天井が遺存する。遺存の良い掻き出し口はドーム状を呈し、長さ0.7m、幅0.5m、高さ0.4mである。また、掻き出し口の内側は黄または赤の酸化色を呈する。焚き口には被熱され赤色化した礫が7個見られ、閉塞に使用されたと思われるがスサ粘土などは見られない。前庭部は斜面を含めて隅丸方形に造り出されており、長さ3.3m、幅3.5m(当初はおそらく谷部まで広がるものと思われるが、範囲は明確でない)である。焚き口との間には10cmの段差があり低くなっている。土層の観察から少なくとも前庭部の床面は2回以上使用されている。当初は黒褐色土層面でもわずかに浅く窪み、斜面側の水切り溝は谷部に連続している。次に埋め戻され幅3.5mの隅丸方形となる。山側の水切り溝は、奥壁煙出しから前庭部にかけて竈体を囲むように「コ」字状に配置されている。水切り溝は幅50cm、深さ1.1m、断面は漏斗状を呈する。底部は竈体の床面と同じレベルで回り、いずれも谷側に排水される構造竈体の周囲には、ほぼ平行してP1-7のビット7本が検出されている。ビットはどれも径20-30cm、深さ40-60cmである。P1-4は掻き出し口前庭部に、P5-7は竈体と水切り溝との間にそれぞれ配置されている。さらにP2-3は掻き出し口の間に位置することから、竈の構造を無視したものでないことがわかる。これにより3間以上×1間規模の建物(覆屋)が想定される。総長は桁行6.02m、梁行1.94mとなろう。梁行は煙出し側で1.94m、焚き口側で1.82mとやや焚き口が狭くなる。また、焚き口前庭部側のP8に関しては検出されなかったが、同じ妻側のP4は黒褐色土の下で検出していることから、当初から覆屋が付帯していた可能性が指摘される。

(4) 穴

SK01 (第184回)

S-01の南西7mに位置する。半分は谷部の崩落により失い、西側をわずかに攪乱されるが東西幅0.96m、深さ0.40mの焼窯穴である。壁面は被熱され酸化し赤褐色となっている。覆土中にはわずかな炭化物が混じる程度で遺物の出土はない。

8 赤坂C遺跡V地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂45-1外

(1) 立地 (第43回)

赤坂C遺跡が立地する谷は、谷頭から450m入り込んだ付近では幅狭く20mとなり、谷を挟んだ両斜面にはそれぞれ製鉄炉あるいは炭焼窯が築かれている。V地区はその西斜面の一角に位置し、農道を拡張した工用道路が取り付

けられている。その工事用道路の西側斜面あるいは道路敷きから炭焼窯を主として各遺構が検出された。また、新たにⅢ・Ⅳ地区が立地する小規模な支谷の谷頭にも製鉄炉を含めた遺構が検出されている。

各遺構は標高47～50mの北から西斜面の低地から1～2m高いところに位置し、谷部の低地平坦部から丘陵斜面へ移行する高さに立地する。

(2) 遺構と遺物

遺構は北と西側の斜面で製鉄炉1、炭焼窯6、標高47～50mの丘陵西斜面から穴4が検出された。

遺物はS-02から須恵器双耳瓶、S-04から須恵器甕・土師器甕が、SK03から須恵器甕の胴部片が、SK04から土師器碗・須恵器皿が出土している。また鉄滓・炉壁は整理箱に2箱と少ない。表探遺物には凹基無蓋式の石鏃があり、縄文時代には谷間を狩猟場とした生態系が窺える。

(3) 製鉄炉跡

S-01 (第188図・図版第28)

S-01の製鉄炉はⅤ地区に入るが、実際はⅣ地区の谷間X75.400～75.410Y-6.020～-6.030区に位置する。S-01とSK04はⅣ地区の調査時に発見された。

S-01は標高47.60m「V字」状を呈する谷間の底部に位置し、南側を流れる小川から20～30cm高い所を棚状に成形し築かれている。それと平行して北側の斜面には2段にわたる棚状にSK04が位置する。

掘り方は長さ4.50m、幅1.12m、深さ0.14mの長方形の箱形炉で、平坦部の地形に沿って立地する。上層は褐灰色を呈し炉壁・焼土が混入しており、中央部にわずかな還元色の範囲が見られるが、炭化材が大半で炉床は遺存していない。東端部に流出溝がわずかに残る程度である。下層は厚さ5～8cmの炭化材で覆われ防湿材として使用され、底面中央と側壁は掘り方の作業前に行なった空焼きにより赤色化している。底面はわずかに東側が低くなっているが、これは意図したものではなく地形に沿ったものと思われる。

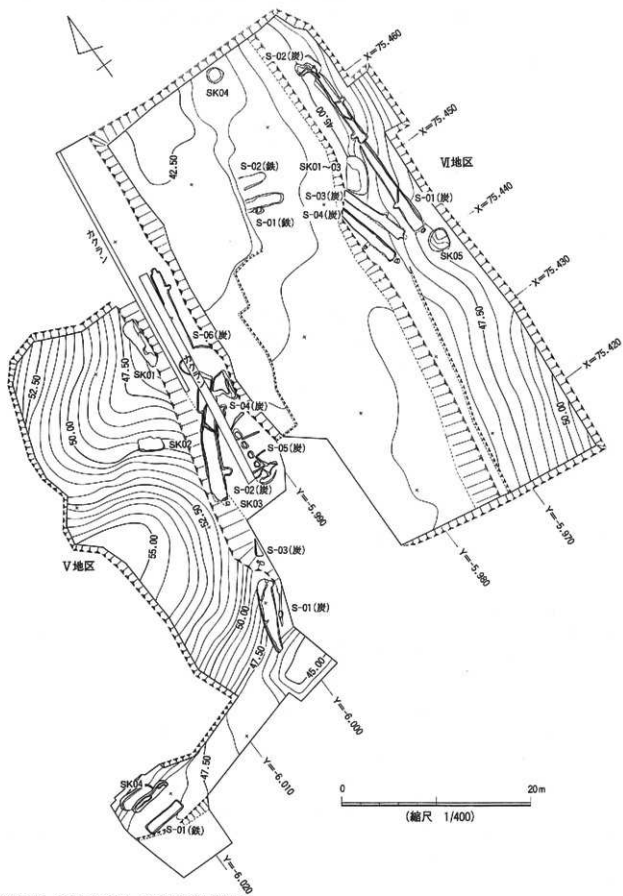
(4) 炭焼窯跡

S-01 (第186図・図版第29)

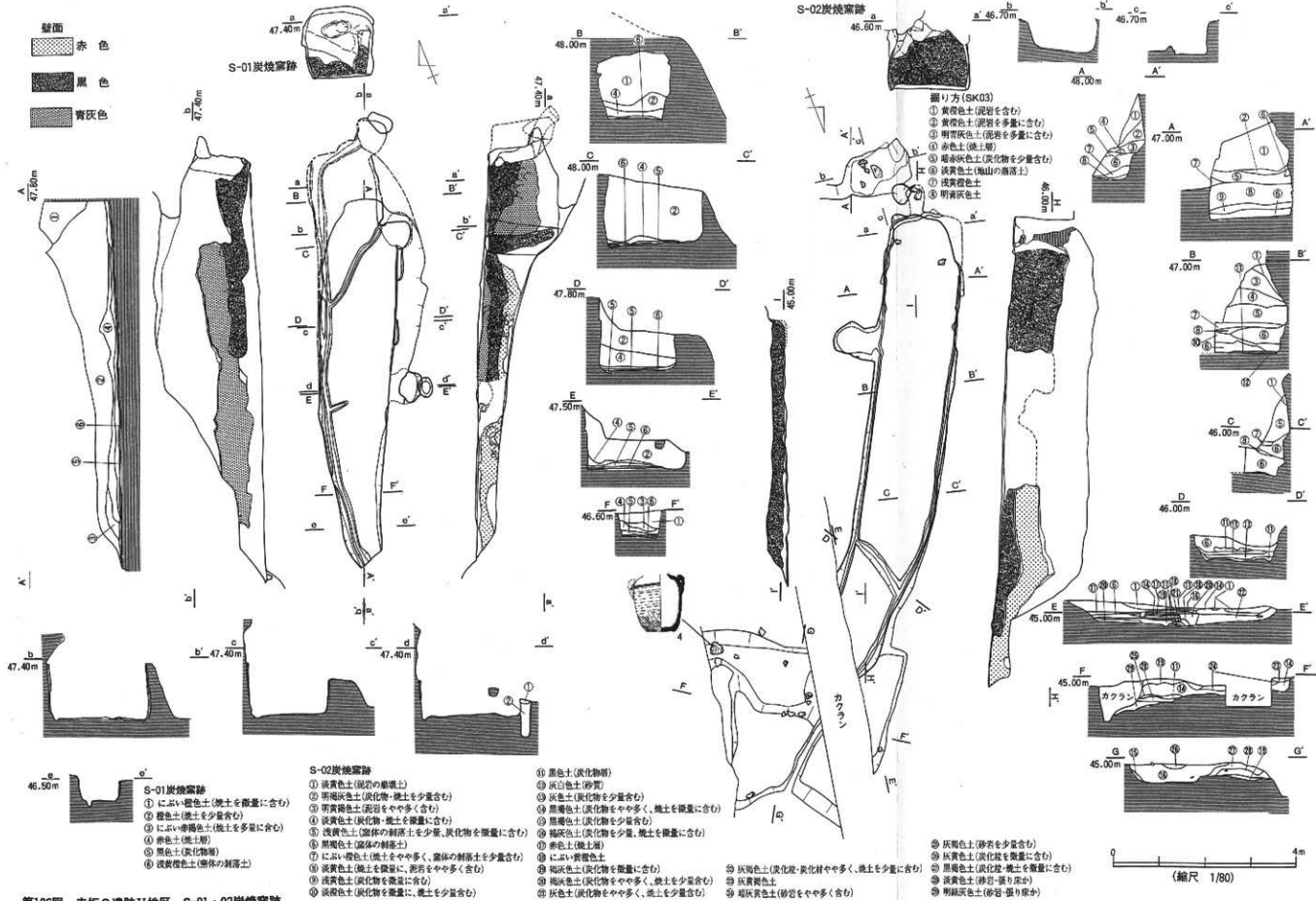
S-01はX75.420Y-6.000区に位置し、丘陵の西斜面に立地する地下式の炭焼窯で、丘陵の基盤層である青井谷泥岩層を掘り抜いて構築されている。S-01の煙出しから焚き口は北から南側に長軸をとり、等高線にはほぼ平行する全長9.2mの炭焼窯である。窯体の床面幅は奥壁で1.4m、焚き口で0.7mとバチ状を呈し、天井部は奥壁から1.2m、高さ1.5m遺存する。床面の傾斜は焚き口から中央で2度、中央から奥壁では5度である。奥壁床面から掘り込まれた排水溝は窯体の西側壁の下に沿って焚き口まで続き、東側壁2箇所の煙出しからも連続あるいは断続的に構築されている。また、煙出しの底面は窯体の床面より若干低く排水溝へつながる。排水溝の覆土には焼土が混じるが底面は被熱痕はない。深さは奥壁で0.04m、焚き口では0.06mである。煙出しは3箇所あり奥壁に1、東壁に2である。特に奥壁には2箇所の穴があり、床面から直接立ち上がるものと、床面から1.2m上の横に掘り込まれたものであるが、途中で前者と一体化する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり天井部はドーム状となる。奥壁は床面から0.40mまで黒色化され、煙出しの床面から直接立ち上がるものは煙道に沿って70cm近くまで黒色化されている。東側壁の煙出しについては実に1.4mまで黒色化し、この高さはほぼ天井に匹敵する。両側の壁は焚き口から4.8mほぼ中程より黒色化し、壁の遺存するところは床面から1mの高さまで青灰色に還元し、特に丘陵側の西壁が顕著である。東側壁では窯体中程に還元化は見られるが幅狭く、床面よりが還元し、黒色・赤色化と酸化が顕著となっている。焚き口は攪乱を受け詳細は明確でない。遺物は出土していない。

S-02 (第186図・図版第29)

S-02はX75.430Y-6.000区に位置する。S-01と同じく丘陵の西斜面に立地し、青井谷泥岩層を掘り抜く地下式の炭



第185図 赤坂C遺跡V・VI地区遺構配置図



第186図 赤坂C遺跡V地区 S-01・02炭焼窯跡

焼窯でS-01と向き合う。窯体の全長は10.2m、床面幅は奥壁で1.7m、焚き口で1.1mであり、焚き口から窯体中程4mの位置で谷側に緩く曲がり窯尻までは直線的である。天井部は全面崩落し遺存しないが、わずかに奥壁の右隅で高さ1.3m以上が推定される。床面の傾斜は一定で焚き口から奥壁では2度である。奥壁床面から掘り込まれた排水溝は窯体の東側壁の下に沿って焚き口につづき、西側側の床面でも中程より奥まった位置から排水溝が始まり、焼成部焚き口付近で両側の排水溝は一本の排水溝で連結される。煙出しは2箇所あり奥壁に1、東壁に1である。壁面から天井部はドーム状を呈する。壁面は崩落し少なくとも2回にわたる補修が見られる。奥壁は床面から1.2mまで黒色化され、両側壁は焚き口からはほぼ1m離れたところから黒色化している。奥壁よりの西側壁は遺存する1.2mの高さまで黒色化されている。焚き口は攪乱を受け詳細は明確でない。前底部はほぼ方形を呈し東側は谷で削られ全貌はわからない。前底部西側（丘陵側）の排水溝が窯体底面から連続して見られるが、東側については攪乱によりわからない。この前底部の谷側から須恵器の双耳瓶が出土している。

S-03（第187図・図版第30）

S-01と02に挟まれた半地下式の炭焼窯であるが、すでに工事用道路で削られ窯体は窯尻を残すのみであり、奥壁右隅が三角状に遺存していた。床面は標高41m、道路から約1mの高さの位置にある。窯体は長さ1.8m以上、奥壁幅0.8m以上で西側壁（丘陵側）には排水溝が付帯する。

S-04（第187図・図版第30）

S-05の北側に位置する。窯体はS-05に切られすてになく、幅1mの括れた部分には両側に円礫が2本立てられカマド状を呈している。被熱痕は見られなかったが、状況から奥壁の煙出し部と思われる。その中と周辺には土師器壺・須恵器壺片が散見される。

S-05（第187図・図版第30）

S-02の東側3mに位置する半地下式の横口式炭焼窯で、工事用道路とその側溝により全貌は明確でない。遺存部は煙出しと奥壁の一部及び掻き出し口4箇所である。前底部は谷部よりに幅1.8m残る。煙出しは奥壁のほぼ中央に見られる。煙出し底面は床面と同じレベルに位置し、高さ0.20m、幅0.40mの長方形を呈し、出口は直接排水溝と連結するようである。排水溝は谷へと続く。排水溝は掻き出し口にも見られるが、焚き口から2つ目の掻き出し口には付属しない。特に1つ目と4つ目は窯体から直接始まり、おそらく窯体の東側（丘陵側）の壁下へ続くものと思われる。類例は墨敷野池B遺跡I地区の2号炭焼窯に近い。

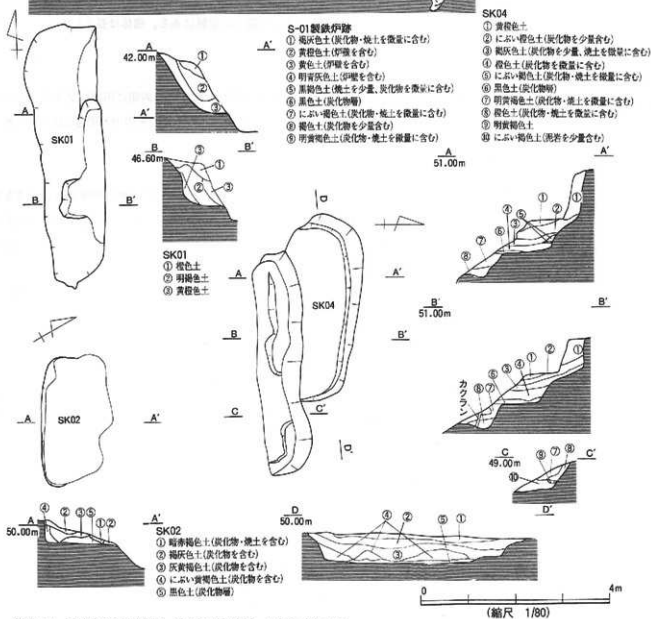
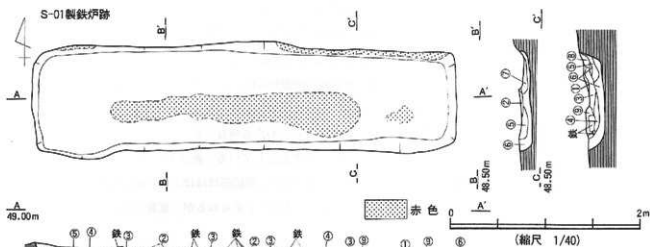
S-06（第187図・図版第30）

S-03の北側3mに位置する半地下式の炭焼窯である。工事用道路の直下で発見され、付帯する側溝により西側（丘陵側）を攪乱される。煙出しを北側に向ける全長8.8m、幅は奥壁で1.0m、焚き口で0.7m、遺存する窯体の深さは奥壁で0.4m、中央で0.4m、焚き口で0.5mである。床面の傾斜は焚き口から中央は水平で、中央から奥壁は5度下がる。煙出しは奥壁に1、東壁に1である。壁は全体的に赤色化されているが、煙出しはそれぞれ黒色化されている。床面の張り替えはセクションB-B'に顕著であり、2～3回の作業が想定される。焚き口の前底部は3.8m×4.0m以上の楕円形を呈する。

(5) 穴

SK01（第188図）

同地区の丘陵東斜面の標高47.10～47.40mに立地し、X75.450Y-6.000区S-06の直上に位置する。丘陵東斜面は若干起伏に富みSK01の位置はその谷部にあたる。SK01の東側は工事用道路により削平を受け全貌は明らかでない。長軸の方向は南北をとりほぼ等高線にも平行し、長さ5.5m、幅1.6m以上、深さ1.4mである。断面は部分的に2段にわたる。覆土の堆積は基本的には地山の橙色土を主体とし、遺物は出土していない。



第188図 赤坂C遺跡V地区 S-01製鉄炉跡、SK01・02・04

SK02 (第188図・図版第28)

同地区の丘陵東斜面の標高47.10～47.40mに立地し、X75.450Y-6.000区に位置する。SK02は起伏する丘陵の山部に位置し等高線に平行して構築されているが、谷側は流失し全貌はわからない。ほぼ隅丸方形を呈し長さ3.6m、幅1.5m以上、深さ0.44mで床面は平坦となる。覆土中には焼土・炭化物を含むが、壁・床面には被熱による赤色化は見られない。

SK03 (第186図)

S-02の堀出しに位置する。堀出し部の掘り方と考えられるが判然としにくい。セクションA-A'より見ると⑤層まで自然堆積され、それから泥岩が一気に崩落している。

SK04 (第188図・図版第28)

S-01製鉄炉の北側に位置する。S-01は平坦部にSK04はそこから3m北側の斜面にそれぞれ位置する。上下2段にわたる遺構であるが、セクションA-A'、B-B'が示すように⑤⑥の炭化物層が下段を切っており、上段と下段は一つの遺構ではないことがわかる。いずれも長軸はS-01にそれぞれ平行しているため関わりが指摘される。下段の掘り方は長さ5.2m、幅0.6m以上、深さ0.58mである。斜面側に幅0.22～0.40mの溝を断続的に有し、焼土・炭化物を含む⑦⑧層が主体的であるが、被熱による赤色化は見られない。

上段は長さ4.0m、幅1.2m以上、深さ1.6mである。2段にわたり掘り込まれ壁面には木炭がわずかに遺存し、壁面・床面にはわずかであるが被熱による赤色化が見られる。遺物は覆土中より土師器杯・須恵器皿が出土している。

(6) 出土遺物 (第199図・図版第38)

1は須恵器双耳壺でS-02の炭焼窯から出土している。耳の側面は面取りの削りがなされ多角形状をなしている。胴部外面は上半に粘土紐の接合が凹凸の痕跡として見られ、下半部は手持ちによる斜位の削りが施されている。2～4はS-04の炭焼窯から出土した遺物であり、2は須恵器甕の口縁部片で口縁部内面に稜を有す。3は土師器甕で口縁部はヨコナデである。4は須恵器鍋で胴部は開き気味に立ち上がり、口縁部は外傾し口唇部で上方につまみ出されている。5・6は須恵器甕の胴部片でともにSK03より出土している。5は内面にHeの当て目、外面にDeの叩き目を施す。6は内面にHbの当て目、外面にDaの叩き目を施す。7は表採の石織で、先端部を欠損した頁岩製である。8・9はSK04の出土遺物で、8は土師器杯でロクロ調整し底部は回転糸切り無調整である。9は須恵器皿でロクロ調整し底部に手持ちヘラ削りを施す。

9 赤坂C遺跡VI地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂30外

(1) 立地 (第43図)

VI地区は、V地区の東側に展開する谷を含めた東側の丘陵の斜面部に及ぶ範囲で、標高は42.50～47.60mである。谷部の平坦部には製鉄炉、1m高い位置には等高線と平行し炭焼窯をそれぞれ構築している。

谷部の最も低い面は西側端部で、谷水は自然に低い面に取東し流路を形成するが、水田の区画を除いては等高線に変化がなく人為的な削平は見られない。自然地形を有効に利用したものであろう。

(2) 遺構と遺物

遺構は谷部の底面に製鉄炉が2、東側斜面に炭焼窯が4、谷部の底面と東側斜面に各2ずつ計4である。

遺物は須恵器杯・ロクロ甕、筒形土製品が各遺構から、表採遺物は須恵器の蓋・杯・捏ね鉢・長頸壺・横瓶・甕、土師器のロクロ杯、鉄滓・炉壁に至っては整理箱で1,690箱と肥料袋で304袋の量を得ることができた。

[3] 製鉄炉跡

S-01 (第190図・図版第33)

S-01の製鉄炉は同地区の谷部の底面に立地し、X75.450~75.460Y-5.970--5.980区に位置し、東側の丘陵に向かって2本の箱形炉が並列する。S-01はそのうちの南側の製鉄炉をいう。遺存部は長さが4m以上、幅1.2m、深さ0.44mで西側は削平され全貌は不明であるが、形状より長方形箱形炉と思われる。

S-02 (第190図・図版第33)

S-02の製鉄炉はS-01に近接して位置し、遺存部が長さ2.4m以上、幅1.4m、深さ0.10mで、北端部と西側は削平され全貌は不明であるが、形状より長方形箱形炉と思われる。

[4] 鉄滓散布地 (第189図・図版第33)

S-01・02の製鉄炉を包括して広く鉄滓・炉壁が散布され、南北22m、東西20mの範囲に及んでいる。総重量にして30,901kgに達する。分布結果は第189図に掲載してある。その分布図によれば、500kg以上分布するグリッドはX5Y10、X4Y9~X6Y9・X8Y9、X5Y8~X8Y8、X8Y7でX7Y9が50~100kg未満となる理由は、S-02の西端部は削平を受けるが本来はX7Y9にまで及んでいたものと思われる。他の状況から見れば東側には少なく、西側に多い理由は高い位置から低い位置へ排滓する自然の原則に従ったものと思われる。またS-01・02の各炉体に鉄滓の分布量の差が見られるのは、あるいは同時操作ではなくS-01・02には作業の時間差が考えられ、S-01上には50kg未満、S-02上には50~100kgの分布量からすれば、S-02が古いとする理由になろう。

このことは炉壁の分布にも明確に見られ、S-02上には10kg未満であるのに対して、S-01上には皆無であることから理由付けが可能である。さらに東へ鉄滓の分布が幅狭く伸びる理由に関しては、炭焼窯との間の道路に敷いたことを想定している。

遺物はX5Y7区で須恵器杯、X6Y6区より須恵器杯・蓋・甕が、X6Y7区で土師器杯・横瓶が、X10Y7区より須恵器杯・長頸壺が、X11Y6区で捏ね鉢・横瓶・大甕が出土している。

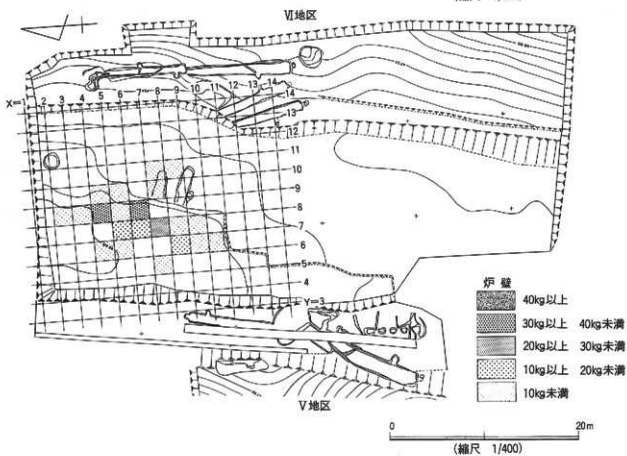
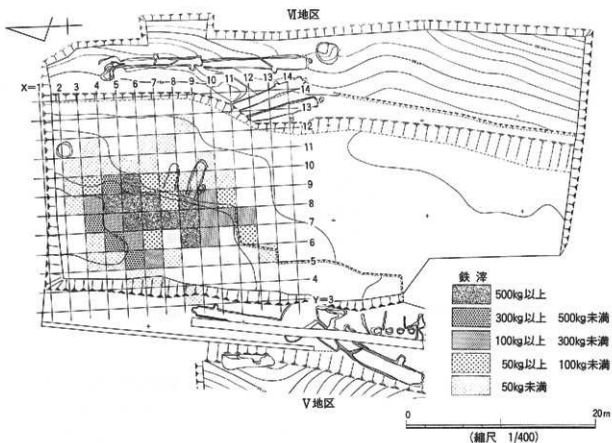
[5] 炭焼窯跡

S-01 (第191図・図版第31・32)

S-01は東側丘陵の西斜面、等高線に沿った標高47.50m上に立地し、X75.440Y-9.670区に位置する。窯体は焼き口が北側に奥壁煙出しは南側に位置し、長さ10.9m、幅は奥壁で1.2m、中央で1.2m、焼き口で0.6mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。床面の傾斜は焼き口で5度、中央で2度、奥壁付近で水平(0度)となる。排水溝は東壁(丘陵側)に付帯し奥壁のやや手前から焼き口まで、他には西壁の煙出し底部からその排水溝へ斜めに向ってつながる。煙出しは奥壁に1、西側壁に1で、奥壁の煙吸い込み口はほぼ奥壁下部の中央に位置し、幅0.42m、高さ0.24mの方形を呈し床面よりわずかに低くなるどころから構築されている。煙道は垂直に立ち上がる。西壁の煙出しは崩落し形状の一部を留めるだけとなっているが底部は窯体床面より若干低い。窯体内部の色調は、奥壁と窯体中程までの側壁が床面から、側壁の煙出し及び窯体中程から焼き口までは床面の20cm上部でそれぞれ黒色化しているが、窯体中程から焼き口は大半が赤色化している。遺物の出土はない。

S-02 (第191図・図版第32)

S-02はS-01の北側に近接して位置する。窯体は焼き口が北側に、奥壁は南側に位置し、長さ8.7m、幅は奥壁で1.0m、中央で1.0m、焼き口で0.9mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。床面の傾斜は焼き口で2度、中央で3度、奥壁付近で6度となる。排水溝は東側壁下の奥壁から煙出し手前の間と窯体中程の西側壁下から焼き口までであり、東側の溝は床面を斜行しながら西側の溝につながる。また、煙吸い込み口の底面は排水溝に連続するものではなく、エレベーションd-d'のように排水が煙吸い込み口床面へ流れ込む構造となり、水分は煙出しから蒸発したも



第189図 赤坂C遺跡V・VI地区 鉄滓・炉壁分布図

のであろう。さらに排水溝を伴わない西側壁煙出しの底面は床面より一段低くなる。煙出しは奥壁に1、側壁に2(各側面各1)で、前述したように床面は竈体のそれより低くなる。竈体内の色調は奥壁の西側下が黒色化し、東側面は奥から中程までが床面から20~30cmの幅で赤色化しそれより上が黒色となる。西側面は煙出しを除き全体的に赤色化している。焚き口は中央に排水溝が位置し前底部に続く。前底部は幅1.4mの「L字状」を呈する。遺物の出土はない。

S-03 (第191図・図版第32・33)

S-03はS-01の西側、両奥壁間で90cmと近接している。竈体は焚き口が北側に奥壁は南側に位置し、長さ7.8m、幅は奥壁で1.2m、中央で0.9m、焚き口で0.9mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。床面の傾斜は焚き口で18度、中央で10度、奥壁付近で3度となり、他の炭焼窯に比べ傾斜が強い。排水溝は特に構築されてなく、床面との傾斜と関係がありそうである。煙出しは奥壁に1、東側壁に1である。奥壁の煙出しは幅0.4m、遺存高1.2mで掘り方はなく、断面はややオーバーハング状となり底面は竈体床面より若干低くなる。東側壁の煙出しは幅0.4m、遺存高1.0mで掘られ、断面はややオーバーハング状となり床面は竈体より若干低くなる。竈体内の色調は焚き口から1m程離れた両側壁・床面ともに黒色化し奥壁まで達する。また、赤色化の範囲は東側壁の煙出し底部焚き口方向に徐々に広がる。遺物は筒型土製品1点が東側壁の床面に接して出土している。位置は断面f-gより0.5m中程である。出土状況は筒型土製品が壁面にほぼ平行に沿って横位で出土している。

S-04 (第190図・図版第32・33)

S-04はS-03の西側、1.1m離れてほぼ平行に位置する。竈体は焚き口が北側に奥壁は南側に位置し、焚き口側は削平されている。竈体は長さ7.4m、幅は奥壁で1.1m、中央で1.1m、焚き口で0.8mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。床面の傾斜は焚き口で4度、中央で2度、奥壁付近で0度となり、S-03と同様に焚き口の傾斜がきつい。排水溝は奥壁の煙出し底部から東側壁下を通り焚き口まで続き西側壁の煙出し底部からの溝が東壁下で直交する。煙出しは奥壁に1、西側壁に1である。奥壁下部には高さ0.16m、幅0.38mの方形の煙吸い込み口が竈体床面よりやや低い位置から築かれる。煙道は径0.4m、深さ1.1mの楕円形で各々遺存している。西側壁の煙出しは竈体のほぼ中央に位置し、竈体床面より低い位置から径0.40~0.44mの煙道が斜めに構築されている。側壁の色調は床面から全体的に黒色化され、わずかに東側壁の奥壁から焚き口付近にわたり10~40cmの幅で赤色化している。遺物は筒型土製品(第200図4・28)がまとまって約26個体が、焚き口から2.2m離れた東壁に接して床面から50cm浮いた状況で出土している。筒型土製品の状況は一律でなく酸化焰と還元焰の製品が混在し、内外に「へら記号」状の線刻を有するものもある。筒型土製品のうち酸化焰と還元焰の比率は21:3である。また、それらは⑨層の竈体の制落土中に混在することから、廃棄された竈体に投棄されたものである。同様の筒型土製品は先のS-03の床面から出土しており、このことからS-04と03の関係はS-04が古くなる。筒型土製品の類例は権土遺跡D地区(1987 関)の製鉄炉下部の鉄滓堆積層から同様の製品が出土しているが、製鉄炉に関わる遺物とだけ触れられている。このほか遺物では須恵器の杯(第200図2・29)と甕(第200図3)が出土している。

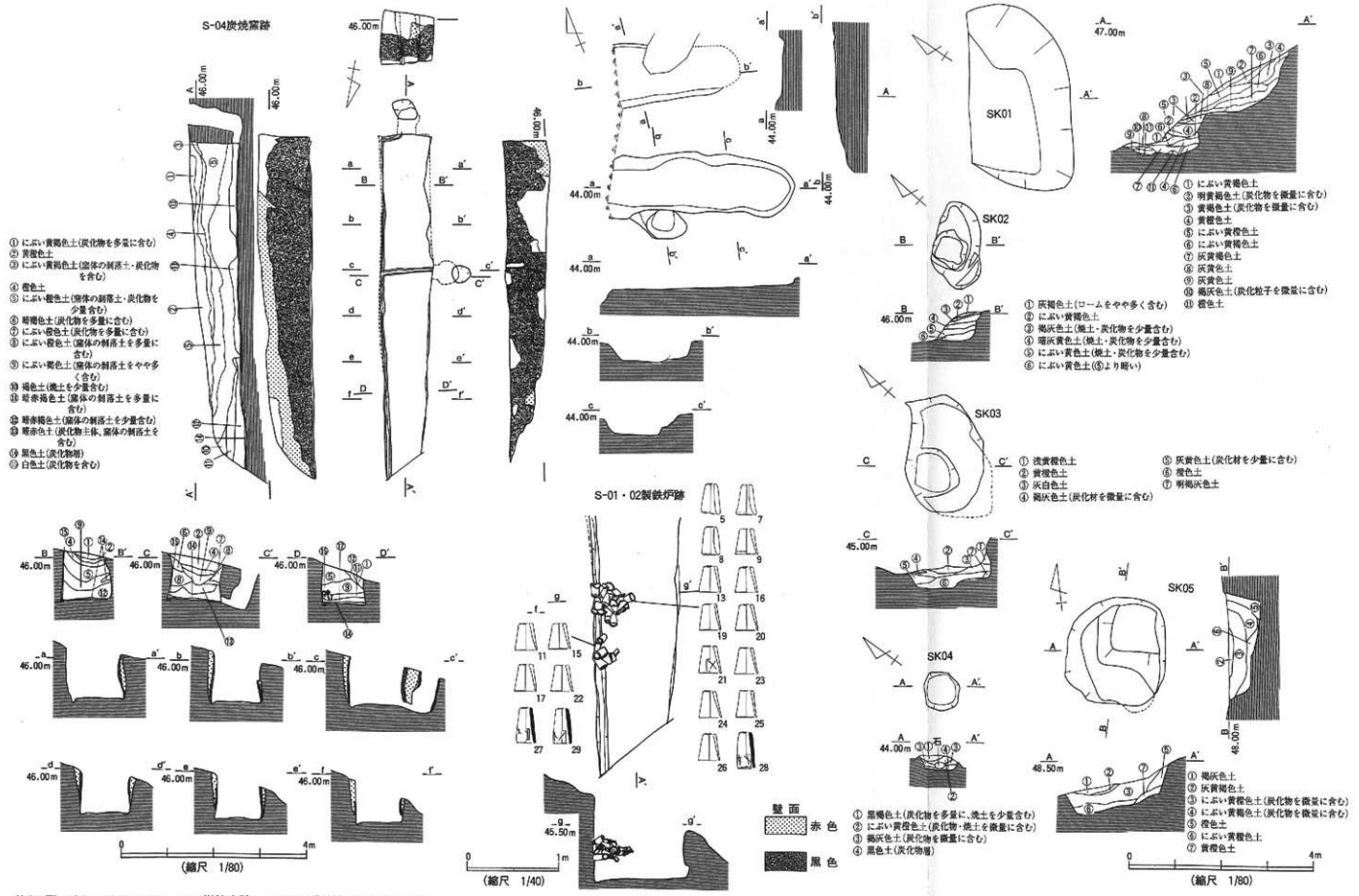
(6) 穴

SK01 (第190図)

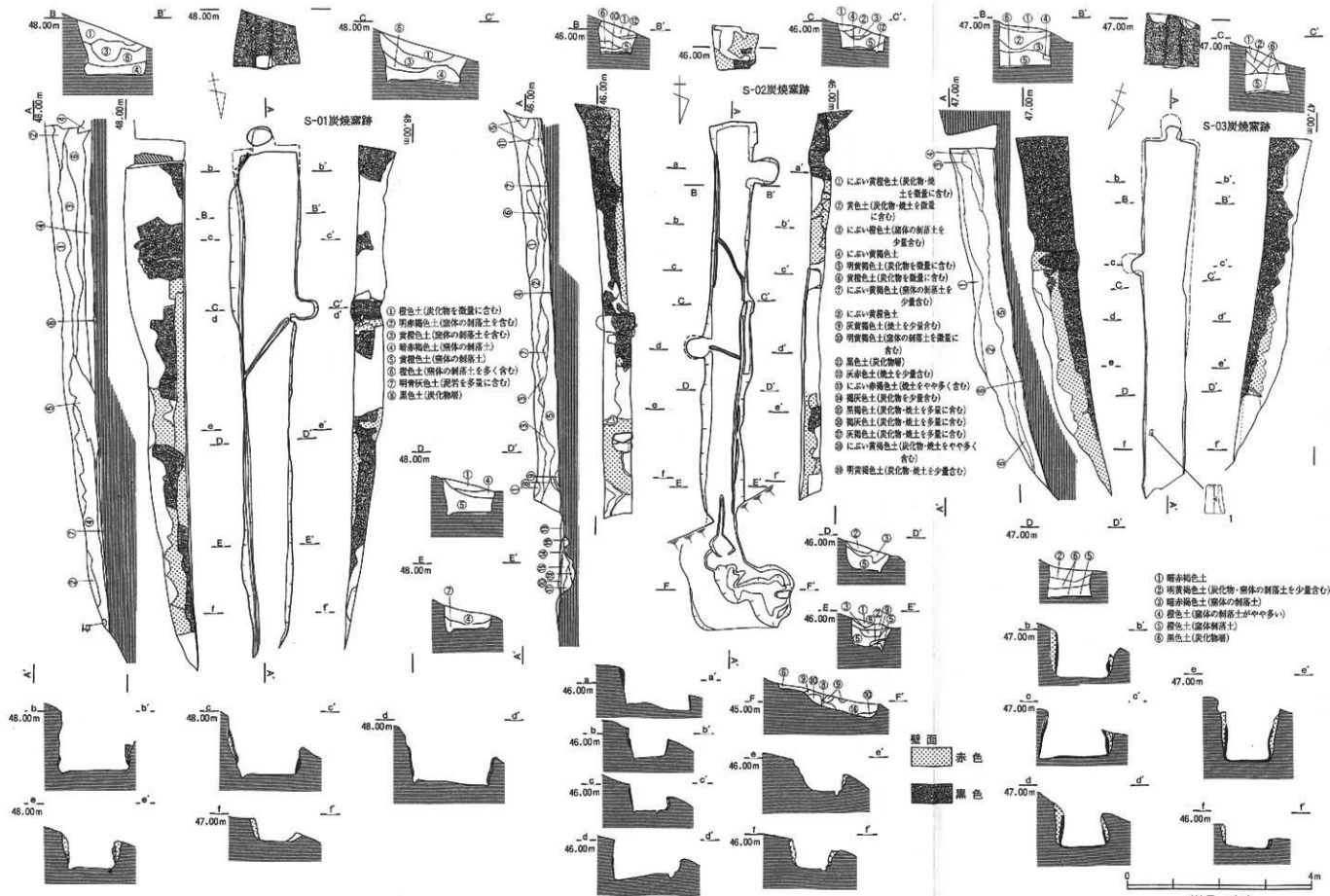
SK01はS-01とS-03の炭焼窯との間に位置し、SK01-03は重複する。SK01は立地する斜面の一部が耕作により削平され全貌は明らかでない。長軸方向を南北にとり長さ3.8m、幅2.2m以上、深さ0.8mである。覆土は自然堆積で上層の②③層に炭化物を微量含む。遺物の出土はない。

SK02 (第190図)

SK02はS-01とS-03の炭焼窯との間に位置する。SK01と同様に斜面に立地するため削平され全貌は明らかでない。長さ1.8m、幅1.0m以上、深さ0.6mである。形態は楕円形を呈し中央にはさらに浅い掘り込みを1段有する。③層



第190図 赤坂C遺跡VI地区 S-04炭焼窯跡、S-01・02製鉄炉跡、SK01-05



第191図 赤坂C遺跡Ⅵ地区 S-01~03炭焼窯跡

以下焼土・炭化物を含むが壁面には被熱痕は見られない。

SK03 (第190図・図版第31)

SK03はS-01とS-03の炭焼窯との間に位置する。一部は斜面に立地するため下端が上端より中に入りオーバーハングする。形態は楕円形を呈し、長軸方向を南北にとり長さ2.6m、幅1.8m、深さ0.44mである。覆土は自然堆積である。

SK04 (第190図・図版第33)

SK04はⅥ地区の北端、谷部のX75.470Y-9.970区に位置する。形態は略方形を呈し一辺3.60m、深さ0.30mである。覆土には各層中に焼土・炭化物が混じり、最下の④層には炭化物の純層が堆積しているが、壁面には被熱痕は見られない。

SK05 (第190図・図版第31)

SK05はS-01炭焼窯の奥壁煙出しのやや南側に位置する。斜面に立地するため土層断面A-A'が示すように下端は地形に沿って形成される。形態は略方形を呈し一辺2.40m、深さ0.34mである。覆土には③④層に炭化物を含む程度である。

(7) 出土遺物 (第200-202四45・図版第88・89)

1は筒型土製品でS-03の炭焼窯から出土している。口径5.2cm、底径8.4cm、高さ12.4cmの筒形を呈し器厚は均一に厚い。焼成は酸化焙で橙色を呈するが口縁部では青灰色を呈し還元化されている。体部外面中央部には「+」のヘラ記号が認められる。

2-29はS-04の炭焼窯から出土している。2は須恵器杯で矩形の高台を有し口縁部は直線的に開く。底部はヘラ切りである。3は須恵器長甕で口縁部を上方向につまみ出している。胴部外面にはカキ目が施された後、下部に叩き目が施されている。4-28は筒型土製品で焼成・形状により4類型に分けることができる。4-21は酸化焙焼成となり橙からいぶき黄橙色を呈する。口縁部の器厚が厚く底部に向かい次第に薄くなる断面形状を持ち、全体に良く類似した造りである。法量値でもほぼ一致し口縁部径5.8-6.4cm、底径9.5-10.4cm、高さ11.0-12.0cmとなる。22-24は酸化焙焼成となり橙からいぶき黄橙色を呈する。器厚は全体に厚くやや粗雑な造りである。法量値的には開きがあり口縁部径4.5-5.0cm、底径8.0-9.0cm、高さ12.4-13.2cmとなる。25は酸化焙焼成となり橙を呈する。器厚は全体に薄い造りとなる。法量値は口縁部径4.4cm、底径8.5cm、高さ15.0cmとなる。26-28は還元焙焼成で灰白色を呈する。3点とも類似した造りで、器厚は全体にやや厚めとなり上半が厚く底部に向かい薄くなる。すべての体部外面下部に「×」のヘラ記号が2組認められる。29は須恵器杯で体部から口縁部は直線的に立ち上がり、底部は回転ヘラ切りである。

30-41は遺構外出土の土器で、32の土師器を除きすべて須恵器である。

30は杯蓋でX6Y6区から出土し、偏平な鈕を有し天井部外面に回転ヘラ削りが施される。31は杯でX6Y6区から出土し、底部は回転ヘラ切りで切り離されている。32は土師器の杯でX6Y7区から出土し、体部外面下端に手持ちヘラ削り、底部は回転糸切り無調整となる。33は杯でX5Y7区より出土している。口縁部から体部は直線的に開き、底部は回転ヘラ切りとなる。34は杯でX10Y7区から出土し、口縁部は外反気味に立ち上がり、体部中位に沈線状のクロロ目が走る。35は甕でX6Y6区から出土し、胴部外面にHeの叩き目を内面にDaの当て目を施す。36は横瓶の口縁部破片でX11Y6区から出土している。37は甕の底部破片でX6Y6区から出土し、高台は三角形断面を有している。38は長頸壺の胴部破片でX10Y7区から出土し、肩が張り胴部の上位に稜線を有している。39は捏ね鉢でX11Y6区から出土し、底部と胴部下端に孔が見られ、内面見込みに鉄分が付着する。40は横瓶の胴部破片でX6Y7区から出土し、胴部外面にはHeの叩き目後カキ目、内面にDaの当て目を施す。41は大甕でX11Y6区から出土し、胴部外面にはHaの叩き目後カキ目、内面にDaの当て目を施す。

42・43・45は製鉄時の排滓（流出滓）で42・43はX9Y7区、45はX7Y8区から出土している。44は箱形炉の炉壁でX10Y7区から出土している。

10 赤坂C遺跡Ⅵ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂45-1外

(1) 立地 (第43図)

Ⅵ地区はⅤ地区の小規模な谷を挟んだ北斜面に位置し、赤坂C遺跡を形成する谷間の西側となる。調査区は標高57.00～44.50mの斜面上に立地し、X75.550～75.490Y-6.010～-5.990区に位置する。地山は黄、橙、桃色、白色土と多色にわたるが、基盤層である青井谷泥岩層は標高45.00m付近で露頭する。

(2) 遺構と遺物

遺構は炭焼窯1、穴3で斜面の炭焼窯の下にはピット群がある。遺物には須恵器があり、炭焼窯から杯が、斜面の黒色土層から杯（体部中位に沈線）と甕が出土している。鉄滓・炉壁は整理箱に1箱の量である。

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第192図・図版第34)

S-01は斜面の上位に立地し標高55.00mに位置する。斜面の上位にあるため高位地と思われがちであるが、実際はⅣ地区のS-01 (標高57.00m)の方が高位地にある。S-01は等高線に平行するように構築され、窯の主軸方向を東西にとり長さ4.1m、幅は奥壁で0.8m、中央で0.7m、焚き口で0.5mの横口式炭焼窯である。奥壁の煙出しは高さ15cm、幅25cmの長方形を呈し煙道の底部は床面より約15cm低い。奥壁と煙道部はスサ入り粘土でそれぞれ修復され、煙道は真直ぐでなく南端に位置する。床面は中央がやや窪むものの傾斜は奥壁から焚き口間は2度である。焚き口付近には15cm大の礫が散乱していることから閉塞の残片と思われる。掻き出し口は4箇所あり幅30～50cm、高さは遺存するもので12cmであるがこれは修復されて小規模となったもので、他のそれは高さ約30cm近くに復元される。窯体内の色調は奥壁・煙出しが黒色、中央は北壁が崩落し不明、焚き口付近は床面のみならず壁面まで全体に赤色化している。前庭部は斜面側を2段に成形されているが一定でなく、さらに南側は段差を生じて削平を受けている。掻き出し口の前庭部は緩やかな斜面となり、削平を受けSK01・02の位置する斜面に連続する。窯体の完掘後掻き出し口前の1番目、2と3番目の間、4番目にはP1-3の小ピットが検出されている。径は20～30cm、深さ45～80cmで窯体の主軸方向とは平行するが、この柱列のみでこれに対応するものは検出されなかった。柱間はP1-2が1.35m、P2-3が1.65mである。これについてはⅣ地区のS-01と同様の覆屋、あるいは作業場が想定されるが詳細は明確にし得なかった。また、P1は掻き出し口の正面に位置することから、当初は1番目の掻き出し口はなかった可能性が指摘されるなど、幾度かの修復あるいは改築が認められる。遺物の出土はない。

SK04はS-01の煙出しに近接し、煙出し口も南に偏在するなどSK04が修復・改築時にはすでにあったことが窺え、SK04は不定形形態や被熱されていないなどの理由により採掘穴と考えられる。

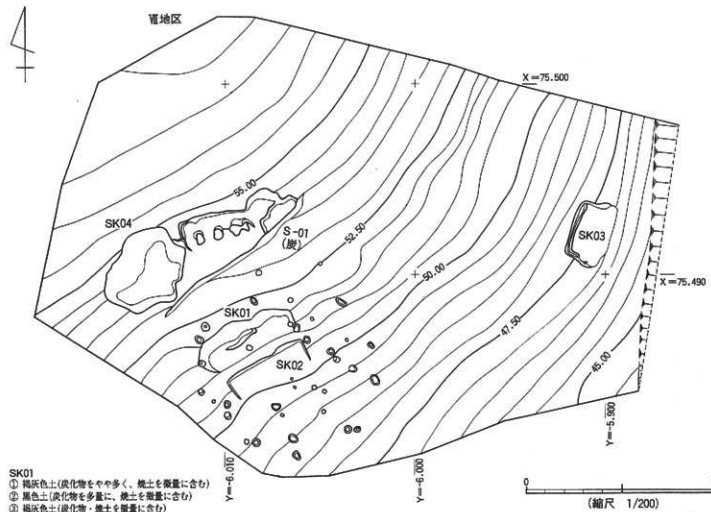
(4) 穴

穴は4基検出されている。S-01炭焼窯の南斜面に連続してSK01・02が、S-01の東側15mにSK03が、SK04はS-01の西側に近接してそれぞれ位置する。

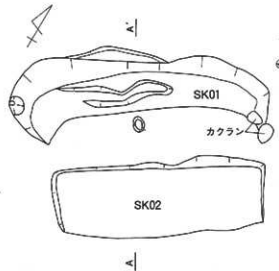
SK01・02はS-01より掻き出されたと思われる炭化材・焼土粒などが堆積した斜面からの検出である。

SK01 (第192図・図版第34)

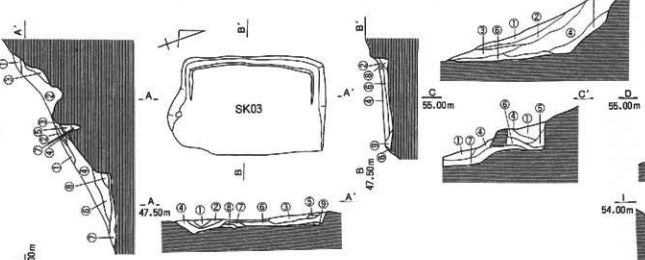
SK01はS-01炭焼窯の南側5mに位置し、標高51mの等高線に平行して構築されている。南側は崩れ全貌を留めていないが長さ5.6m、幅1.8m以上で楕円形に近い。底部の北壁面側には深さ0.2mの溝状の遺構が見られ、セクションA-A'では②層でまともな遺構に伴うことがわかる。壁面には被熱痕は見られない。南端の小ピットは深さ50cmあ



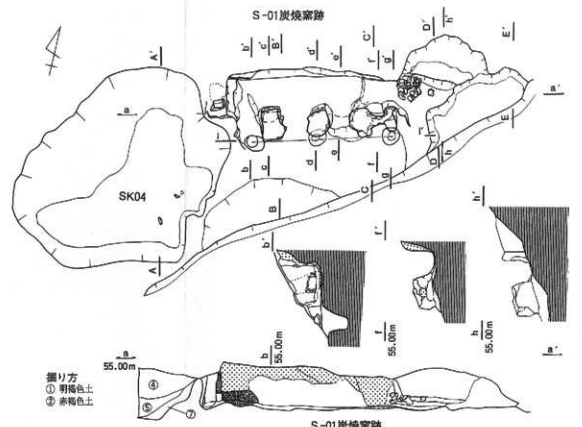
- SK01
- ① 褐灰色土(炭化物をやや多く、焼土を微量に含む)
 - ② 黒色土(炭化物を多量に、焼土を微量に含む)
 - ③ 褐灰色土(炭化物・焼土を微量に含む)



- SK02
- ① 濃い、黄褐色土(炭化物・焼土を微量に含む)
 - ② 褐灰色土(炭化物・焼土を微量に含む)
 - ③ 黒色土(炭化物・焼土を微量に含む)
 - ④ 灰黄色土(炭化物・焼土を微量に含む)
 - ⑤ 黒色土(炭化物を多量に、焼土を微量に含む)
 - ⑥ 褐色土(炭化物・焼土を少量含む)
 - ⑦ 黒色土(炭化物・焼土を多量に、焼土ブロックを微量に含む)
 - ⑧ 褐灰色土(炭化物・焼土を微量に含む)

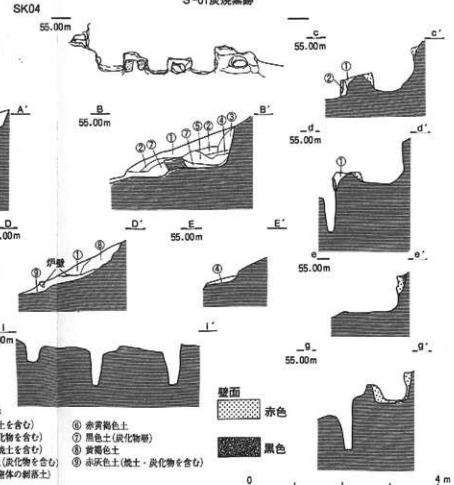


- ① 褐灰色土(炭化物を少量含む)
- ② 灰黄色土(炭化物を微量に含む)
- ③ 青灰色土(炭化物を少量含む)
- ④ におい・黄褐色土
- ⑤ 黒色土(炭化物)
- ⑥ 黄灰色土(炭化物を微量に含む)
- ⑦ 灰白色土(炭化物を微量に含む)
- ⑧ 褐灰色土(炭化物を微量に含む)
- ⑨ におい・黄褐色土(炭化物・焼土を微量に含む)



- 掘り方
- ① 黄褐色土
 - ② 赤褐色土

- SK04
- ① 明赤褐色土
 - ② 黄褐色土
 - ③ 褐灰色土(炭化物・焼土を含む)
 - ④ におい・褐色土
 - ⑤ 灰白色土
 - ⑥ 黒褐色土(焼土・砂をを含む)



- S-01 炭焼窯跡
- ① 灰褐色土(焼土を含む)
 - ② 黒褐色土(炭化物を含む)
 - ③ 褐灰色土(炭化物を微量に含む)
 - ④ 明赤褐色土(炭化物を含む)
 - ⑤ 黄褐色土
 - ⑥ 赤褐色土(炭化物・焼土を含む)
 - ⑦ 赤褐色土(壁体の剥落土)
 - ⑧ 赤褐色土
 - ⑨ 黒色土(炭化物)
 - ⑩ 明赤褐色土(炭化物を含む)
 - ⑪ 黄褐色土
 - ⑫ 赤褐色土(炭化物)

縮尺 1/80

第192図 赤坂C遺跡Ⅶ地区遺構配置図 S-01炭焼窯跡、SK01~04

るがSK01に伴うかはわからない。遺物の出土はない。

SK02 (第192図・図版第34)

SK02はSK01の南側に近接し標高50mの等高線に平行して築かれている。南側は崩れて全貌はわからないが、遺存部が隅角を鋭角とする方形を呈し長さ4.3m、幅1.8m以上である。遺物の出土はない。

SK03 (第192図)

SK03は東端部の斜面に位置し、標高47.50mの等高線に平行して構築されている。他の遺構と同様に東側(斜面下)は崩れて全貌はわからないが遺存部が方形を呈する。西側の壁面下には20cm幅の壁溝が巡っている。遺物の出土はない。

SK04 (第192図)

SK04はS-01炭焼窯の西側に近接した位置にある。南北4.0m、東西4.2mの不定形を呈し、S-01の煙出し部を避けるように「カギ状」に掘られている。このことはS-01で述べたようにSK04の掘り方は、少なくとも煙出し部の構築以後に掘られたと考えられることから修復・改築用の粘土採掘穴と思われる。この穴の位置はおそらく焚き口側の作業のスペースを確保するため煙出し部側に求めたものであろう。セクションA-A'では③④層に炭化物・焼土を伴い、少なくとも2回以上の操業が数えられ、特に最下層の⑥層には窯壁が検出されている。遺物は須恵器の蓋と甕の細片が出土している。

(5) 出土遺物 (第202図1-8・図版第90)

出土遺物は須恵器で1は杯でS-01の炭焼窯より出土している。体部から口縁部は直線的に開き、体部下端に手持ちヘラ削りを施す。2・3・6は杯蓋で天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。4は杯の口縁部片で体部中位に沈線が見られる。5は甕の口縁部片でSK03とSK02出土の破片が接合する。7・8はSK02・03の東側、黒色土から出土している。7は杯で体部から口縁部は直線的に開く。8は杯で底部に回転ヘラ削りが見られる。

11 赤坂C遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂44-1外

(1) 立地 (第43図)

Ⅱ地区はⅠ地区の北側40m、X75.560Y-6.025-5.990区に位置する。Ⅱ地区の地形はⅠ地区と同様に丘陵の東端部、北側から大きく入り込む谷との接点にあたり、この谷から丘陵に直行するように入り込む幅5mの小谷に展開する。遺構はこの小谷の標高40.50-47.00m上の南側斜面を中心に立地する。調査区は谷部の工所用道路から、その小規模な谷を中心とする両斜面にわたる範囲に設定されている。

(2) 遺構と遺物

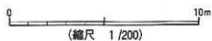
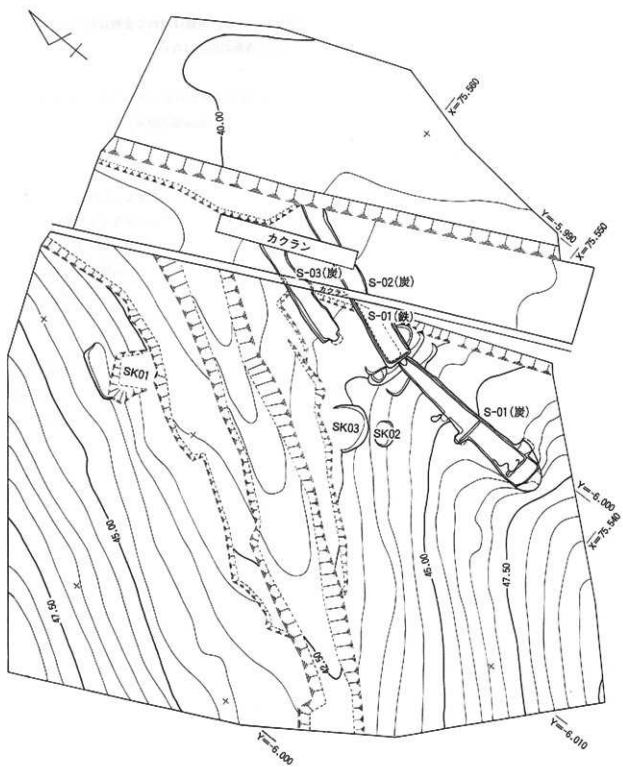
遺構は製鉄炉が1、炭焼窯3、穴3である。大半は工所用道路で切られているが、中でもS-01の炭焼窯はその全貌の修復・拡張がわかる。S-02の炭焼窯は工所用道路の法面にS-01の製鉄炉との重複関係が捉えられ、S-02の炭焼窯の終業後上部を整地されその上にS-01の製鉄炉が造られたことがわかる。穴は谷を挟んだ両斜面に見られ、SK01は壁面が部分的に被熱され焼土化している。

遺物はS-01の製鉄炉から筒型土製品、S-01の炭焼窯の窯体から須恵器の杯蓋と土師器の甕細片がそれぞれ出土している。他には鉄滓・炉壁が15箱出土している。

(3) 製鉄炉跡

S-01 (第194図・図版第35)

S-01の製鉄炉はX75.555Y-6.000区に位置し、標高43.0m上に立地する。大半は工所用道路で切られて全貌はわからない。しかし、その為にS-02炭焼窯の廃絶後上部に黄褐色土を盛り整地しS-01製鉄炉を構築したことがわかる。



第193図 赤坂C遺跡Ⅱ地区遺構配置図

S-01は主軸を南北にとり長さ4.55m以上、幅0.90-1.00m、深さ0.35m、炉底は4度の傾斜を有する長方形箱形炉である。炉底は等高線に対してほぼ平行であるが、炉底は谷側に4度の傾斜を有するところから縦置炉と思われる。

炉体は掘り方を空焼きし10-15cmの除温材とする炭層(⑦層)を底部に敷き、②層が炉床に近い鉄滓と炉壁、鉄滓粒を含む層である。②層上には炉壁・鉄滓が多量に出土し、その範囲は掘り方にほぼ平行して長さ2.5m、幅は南側で70cm、北側では40cmである。つまり②層の範囲と掘り方の間は、細部的には側面南側では25cm、側面東西側で10-15cmの幅が熱を受けておらず炉壁の厚さであろう。両側炉壁間は幅約70cmである。

遺物は北側の端部隅角から筒型土製品が小径部を斜め下にして出土しているが、破片である為か特に固定された形跡は見られなかった。また筒形土製品には被熱痕は見られない。

(4) 炭焼窯跡

S-01 (第194図・図版第36)

S-01はⅡ地区の南側に位置し、標高45.0m上に立地する。主軸方向を南北にとり、焚き口部を北側に煙出し部を南側とする。S-01は等高線に対して直交する長さ8.9m、幅は奥壁で2.2m、中央で1.2m、焚き口で0.8m、深さは奥壁で2.2m、焚き口で0.5mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。

床面の傾斜は奥壁から焚き口は2度となるが、セクションA-A'、D-D'でわかるように焚き口付近の床面は1-3次にわたる補修が見られ、傾斜は1次面(27層)が8度、2次面(23層)は6度、3次面(25層;最新面)は2度である。さらに、奥壁には改築による拡張が見られ、1.突起状のわずかな段差、2.排水溝とわずかな段差、3.現存の奥壁と同時拡張されていることがわかり、焚き口の補修1-3次面がそれぞれ1-3と対応しているものと思われる。排水溝は斜面側の東側壁下に位置し谷側にはない。また、奥壁から1.9mの位置にわずかな段差を生じて、窯体床面を横断する排水溝は改築前の奥壁下のものである。また、東側壁煙出しと西側壁煙出し底面からの排水溝は、東壁下のそれにそれぞれ直交している。煙出しは東側壁に1、西側壁に2である。また、奥壁には床面から0.8m上に高さ0.7m、幅0.9mの楕円形を呈する掘り込みを有するが、貫通はされておらず奥に掘り込みを入れたままのオーバーハング状での遺存となっている。天井部は崩落しているため明確でないが、側壁の黒色化に比べ奥壁あるいは近接する両側壁の黒色化がわずかであることから、側壁の煙出しのみ使用された可能性も考えられる。側壁側の煙出しの底面はいずれも床面より低く、排水溝とともに排水を考慮していることがわかる。焚き口の前庭部は両側に広く掘り込まれた痕跡を留めている。

遺物は西側側の2つの煙出し間に須恵器の杯蓋が出土している。

S-02 (第195図・図版第36)

S-02はS-01の北側に重複して位置し、工事用道路によってその大半を失ない奥壁から中程までの遺存である。中程は床面がわずかに残る程度で焚き口は谷で削平されている。S-02は長さ9.2m以上、幅1.0-1.4mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。窯体の色調は西側壁では中程の床面より徐々に赤色化し黒色化に範囲を広げる。奥壁では大半が赤白化している中で、床面から50cm上に床面に平行して帯状の黒色化が見られる。重複関係はS-01が新しい。床面の傾斜は5度で、煙出しは奥壁にはなく東側に1箇所ある。遺物の出土はない。

S-03 (第195図・図版第36)

S-03はS-02の西側に1.2m離れほぼ並行して位置する。長さ5.3m以上、幅は奥壁で1.2m、中央で1.1m、焚き口で0.8mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。窯体東壁の焚き口付近は直線的でなく部分的に食い違いが見られる。これは崩落した壁面を補修せずそのままの状態で作業したものと思われる。床面の傾斜は2度で西側に排水溝を有する。これまでの多くは山側に設けていたがS-03のそれは谷側である。これはS-03の立地が谷部の低地にあることから、水分の多い谷側に排水溝を設置したものと思われる。煙出しは奥壁に1箇所、下部は崩落し若干オーバーハ

ングする。窯体の色調は側壁で床面より20cm上から、奥壁は縦線状にそれぞれ黒色化している。遺物の出土はない。

(5) 穴

SK01 (第195図)

SK01の焼壁穴はX75.565Y-6.010区に位置し、標高44.00mの西斜面上に立地する。SK01は斜面下側が流失により全貌は明らかでないが、長さ3.0m、幅1.1m以上の長方形に近い形態である。遺存部の西側は被熱により赤色化する焼壁穴である。赤色化した壁は特に硬くはなく地山同様である。床面は平坦で斜面側がわずかに下がり、床面上の④層に炭化物を多量に含む。遺物の出土はない。

SK02 (第195図)

SK02はX75.555Y-6.015区に位置し、標高44.00mの東斜面上に立地する。長軸方向を東西とし長さ1.25m、幅1.0m以上の楕円形を呈する。床面は被熱により赤色化する焼壁穴である。

SK03 (第195図)

SK03はSK02の南に位置し、標高43.00mの東斜面上に立地する。長さ2.3m、幅1.2m以上の楕円形を呈し、上面の①-③層に焼土・炭化材を含むが壁・床面は被熱されていない。

(6) 出土遺物 (第202図 1～5・図版第90)

1は須恵器杯蓋でS-02の炭焼窯から出土し扁平な鈕を有す。2は棒状の鉄製品でSK01の焼壁穴より出土している。3～5はS-01の製鉄炉から出土した筒型土製品である。3は酸化焰焼成の明橙色を呈する。器厚は全体に厚く雑な造りである。4は酸化焰焼成で赤橙色を呈する。器厚は口縁部が厚く底部に向かいしだいに薄くなる。また、口縁部は内面が削りによる面取りがなされ、外面に手持ち削りが施される。5は酸化焰焼成で橙色を呈する。器厚は底が薄く口縁部に向かいしだいに厚くなる。また底部端部は外反する。

12 赤坂C遺跡XI地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂

(1) 立地 (第43図)

標高63～64mの丘陵は南北に細長く貫入し幅20mの谷により二分されている。XI地区は東側の丘陵西斜面上に位置し、標高44m上に立地する。

(2) 遺構と遺物 遺構は焼壁穴が1で、遺物は出土していない。

(3) 焼壁穴

SK01 (第196図・図版第37)

SK01はX75.590Y-6.030区に位置し、緩やかな西斜面上に立地する。SK01は長さ3.6m、幅1.1m以上で、南側は試掘トレンチにより掘削され全貌は明らかでないが、ほぼ長方形を呈するものと思われる。覆土には全体的に炭化物が混入する程度であるが、床面の一部には焼土化していることから焼壁穴と思われる。

13 赤坂C遺跡XII地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂24外

(1) 立地 (第43図)

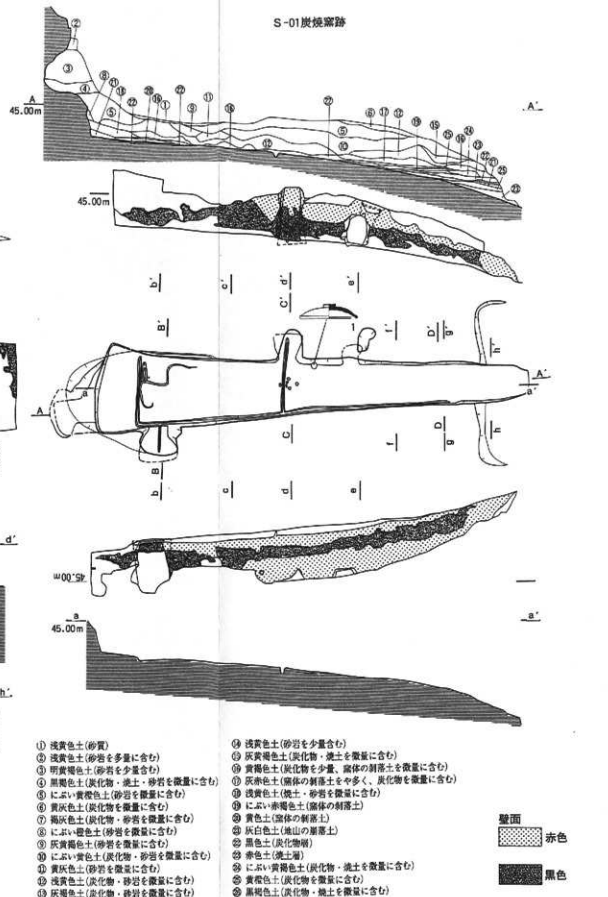
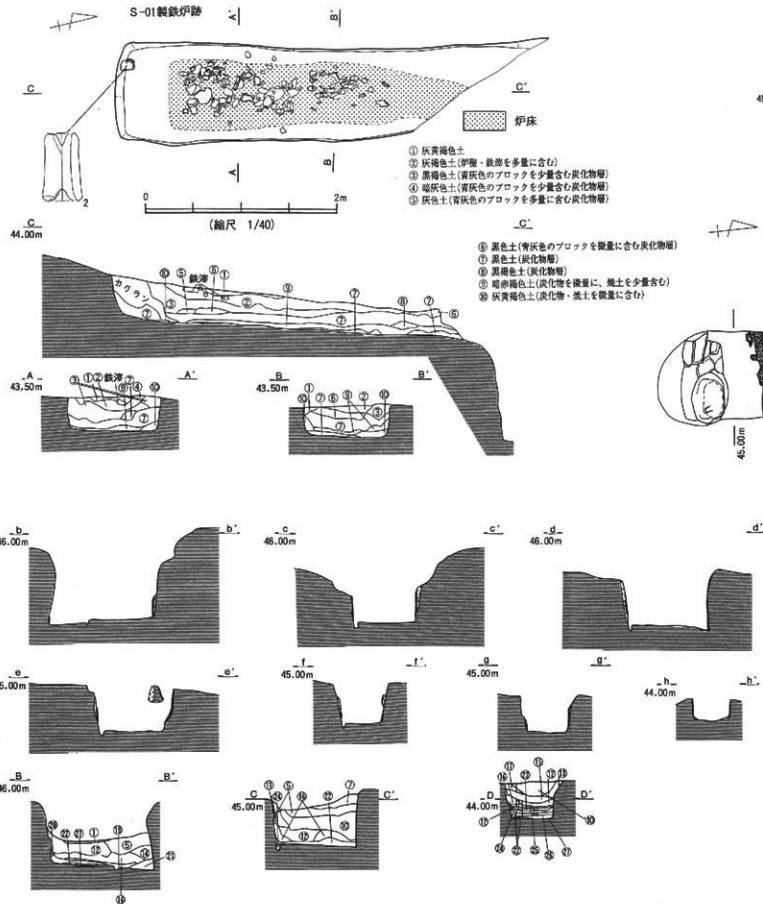
赤坂C遺跡I地区よりさらに150m奥まった谷尻のX75.153Y-5.943区に位置し、標高67.50mの東斜面上に立地する。

(2) 遺構と遺物 遺構は穴1で、遺物は出土していない。

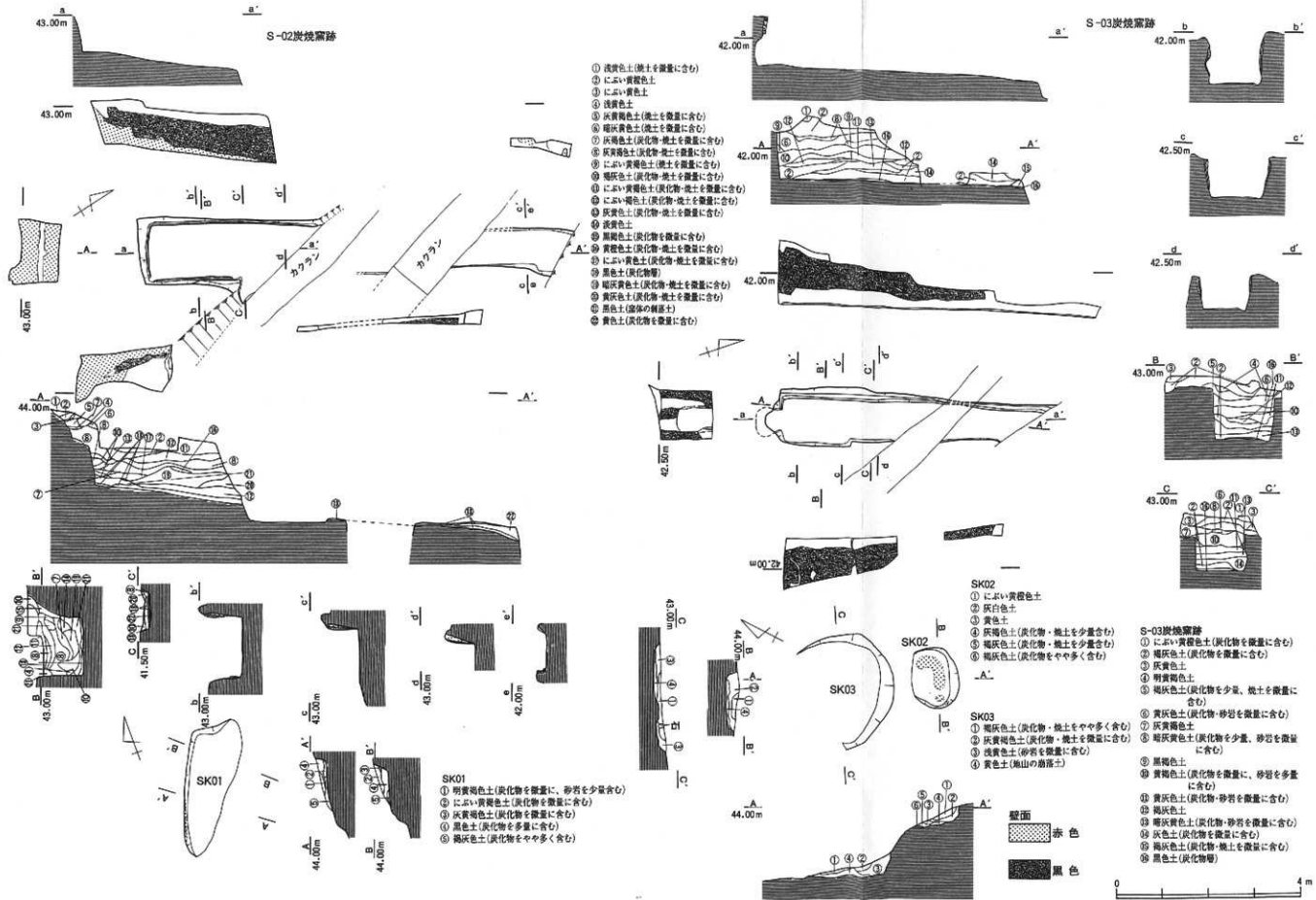
(3) 穴

SK01 (第196図・図版第37)

SK01は等高線に平行して造られた長さ1.7m、幅1.1mの長方形の形状が推定されるが、東側は流失し全貌は明らか



第194図 赤坂C遺跡地区 S-01製鉄炉跡、S-01炭焼窯跡



第195図 赤坂C遺跡直地区 S-02・03炭焼窯跡、SK01~03

かでない。西側の壁面下には溝を有し北側には小ピットがある。

14 赤坂C遺跡XⅥ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂19外

(1) 立地 (第43図)

XⅥ地区は赤坂C遺跡I地区の南東170m、谷を挟んだ西斜面に位置する。調査区は谷尻から50m手前で東側に入り込むやや浅い谷尻の南斜面、標高72.50mに立地する。また同じ標高上にSK01がある。

(2) 遺構と遺物 遺構は炭焼窯1と穴1がある。遺物は土師器甕細片、木炭が出土している。

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第197・198図・図版第37・38)

S-01は斜面の等高線に直交して構築された長さ4.7m、幅は奥壁1.1でm、中央で1.2m、焚き口で1.2mの半地下式の炭焼窯である。S-01は地山に礫を多く含むため崩壊しやすく壁面は大半が失われている。床面には奥壁の煙出しから両側壁下と中央に排水溝が設置され焚き口で1本となる。この排水溝はさらに延び谷部に続くが、どこまで延びるかは途中から斜面の流失により不明である。焚き口から前底部までの遺存部は3mである。傾斜は奥壁から中央で10度、焚き口が2度である。壁面の色調は各煙出しと焚き口が黒色化し、後は焚き口を中心に赤色化している。煙出しは奥壁に1、両側壁に各1ずつである。各煙出しの底面は窯体の床面よりやや高く斜めに造られ、東側の煙出しは円礫を3個組み合わせて煙吸い込み口としている。焚き口の西側には2本の小ピットが窯体方向にある。対応するほかの小ピットは検出していない。2本の小ピット間は50cmである。また、焚き口の周辺には穴が6～7個検出されている。

(4) 穴

SK01 (第198図・図版第37)

SK01はS-01の西側10mに位置する。南側は流失し全貌は不明であるが、遺存部から長さ2.0m、幅0.8m以上ある長方形の焼壁穴と考えられる。覆土は灰色・黒色で下層には炭化物を多量に含む。壁面・床面の表面は黒色または赤色化されている。遺物の出土はない。

(5) 出土遺物 (第202図1・図版第90) 1はS-01炭焼窯出土の土師器杯で皿状を呈する。

15 赤坂C遺跡XⅦ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂19外

(1) 立地 (第43図)

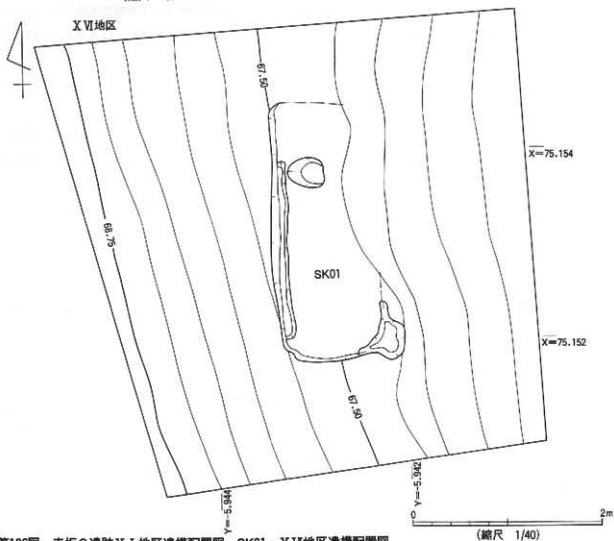
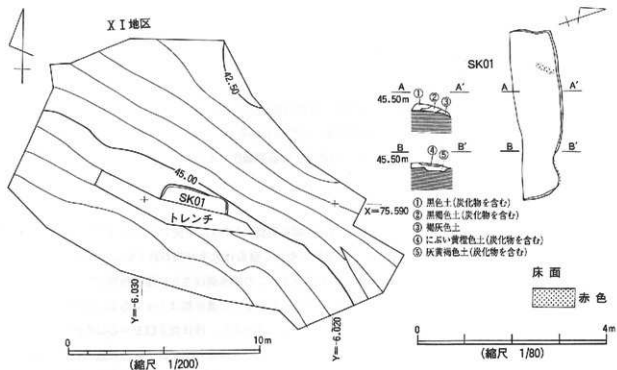
XⅦ地区は赤坂C遺跡XⅥ地区の北西75mに位置し、標高70mの西斜面に立地する。発掘区内の谷部と山側の比高差は14mである。

(2) 遺構と遺物 遺構は炭焼窯が1基で、遺物は土師器の細片がわずかに見られる。

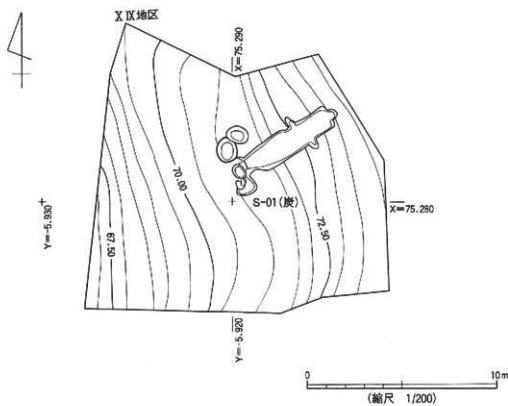
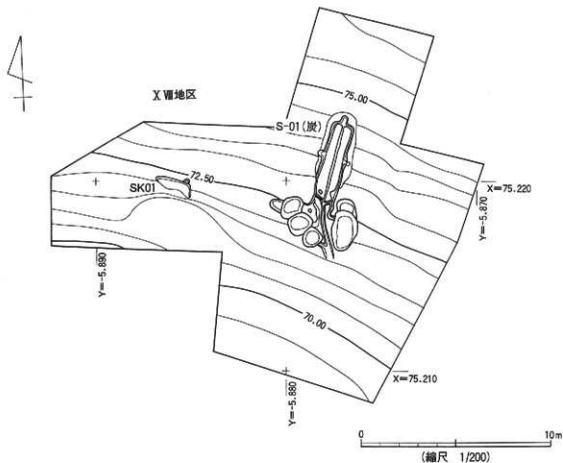
(3) 炭焼窯跡

S-01 (第197・198図・図版第38)

S-01は等高線に直交して構築された長さ5.7m、幅は奥壁で1.6m、中央で1.4m、焚き口で1.0mのパチ状の半地下式の炭焼窯である。床面には排水溝はなく、床面の傾斜は奥壁で12度、中央が10度、焚き口は2度である。色調は各煙出しと焚き口が床面から黒色化され、後は焚き口を中心に赤色化されている。煙出しは奥壁に1、両側壁に各1ずつである。奥壁は大半が崩落し壁面上部に煙道の切れ込みが遺存する。各煙出しの底面は窯体の床面よりやや高く斜めに造られている。また、焚き口の周辺には穴が4個検出されている。 (肥田・松田)

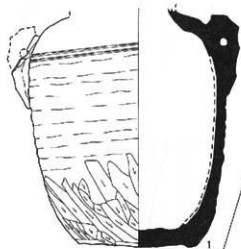


第196図 赤坂C遺跡X I地区遺構配置図 SK01、X VI地区遺構配置図

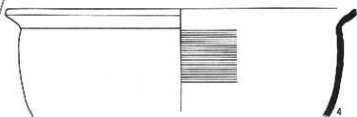
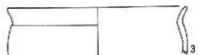
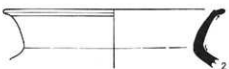


第197图 赤坂C遺跡XⅥ・XⅩ地区遺構配置図

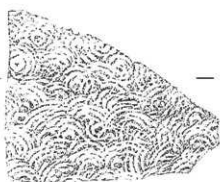
S-02



S-04



SK03



表探



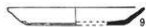
0 5cm

(縮尺 1/2)

SK04



8

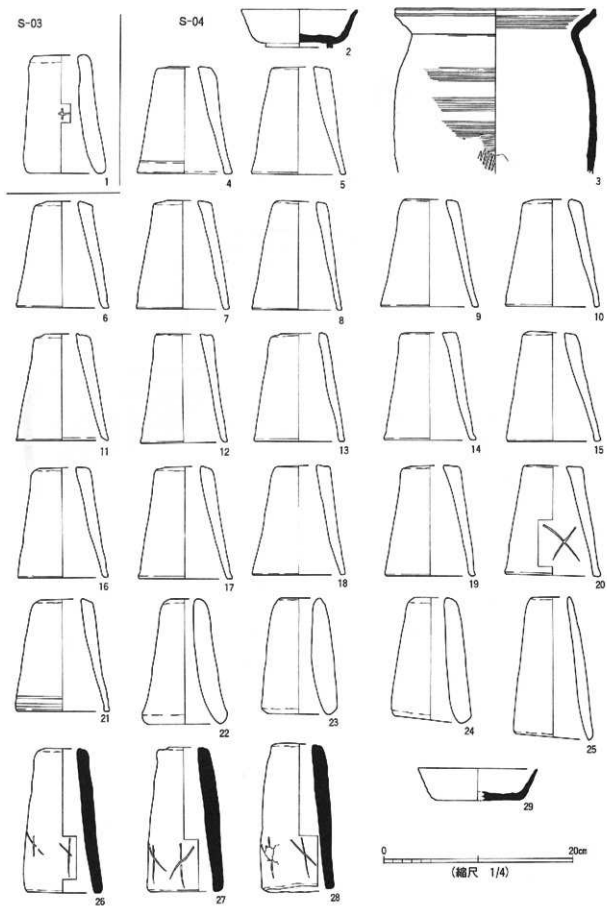


9

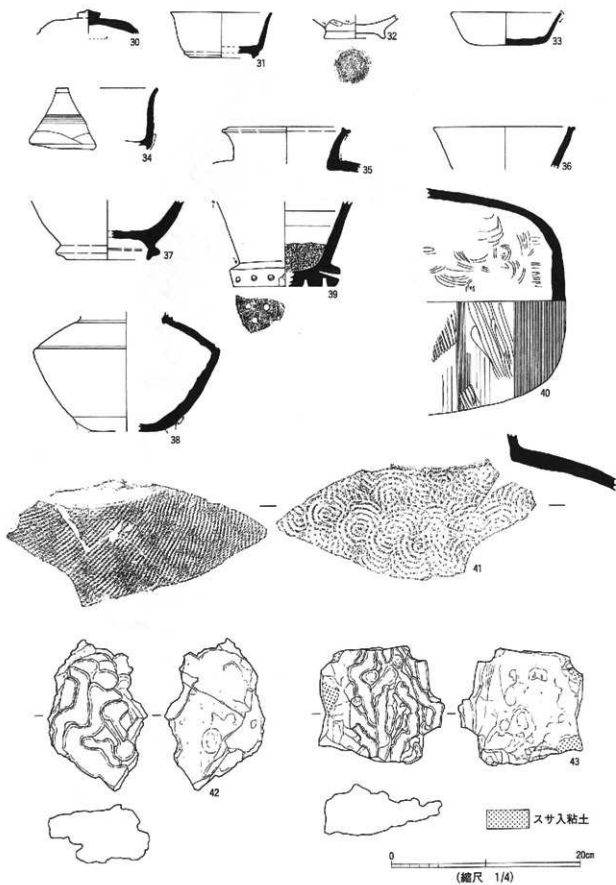
0 20cm

(縮尺 1/4)

第199図 赤坂C遺跡V地区 S-02・04炭焼窯跡、SK03・04、表探出土遺物

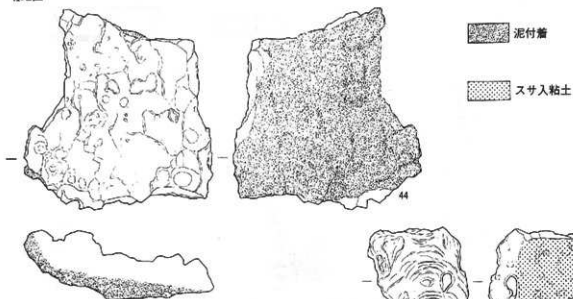


第200图 赤坂C遺跡VI地区 S-03・04炭烧窯跡出土遺物

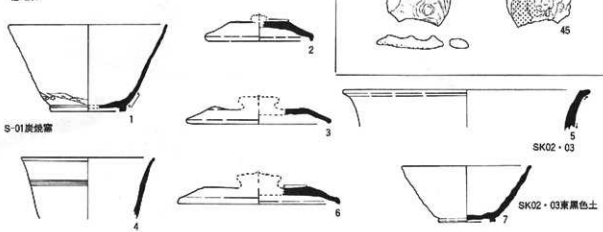


第201図 赤坂C遺跡VI地区 遺構外出土遺物

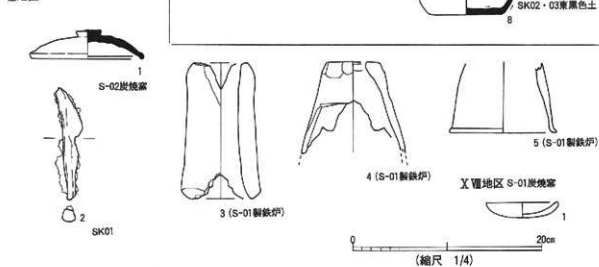
VI地区



Ⅶ地区



Ⅷ地区



第202図 赤坂C遺跡Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・XⅦ地区 出土遺物

16 赤坂A遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂42-1外

(1) 立地 (第203図)

赤坂A遺跡は、綿打池の東側に面して南北方向に1kmの細長く伸びた丘陵であり、さらに小規模な谷が貫入する谷頭に位置し、2地区(赤坂A-Ⅲ・Ⅳ地区)の遺跡を総称している。谷幅は狭く谷頭では50mあり、徐々に狭くなる小規模な谷で奥行きは150mである。遺跡は標高30~60mの丘陵に立地し、遺構は標高41~45mの南緩斜面に集中して遺存する。

(2) 遺構と遺物

遺構は谷の南緩斜面より炭焼窯8、箱形製鉄炉1、石組み鍛冶炉2が検出された。炭焼窯8基については遺構を確認の上埋め戻し現状保存とした。

遺物は箱形製鉄炉、石組み鍛冶炉からファイゴの羽口と鉄滓・炉壁が整理箱にして1箱の量である。羽口はわずかで図示は不可能である。

(3) 炉跡

S-01 (第203図・図版第39)

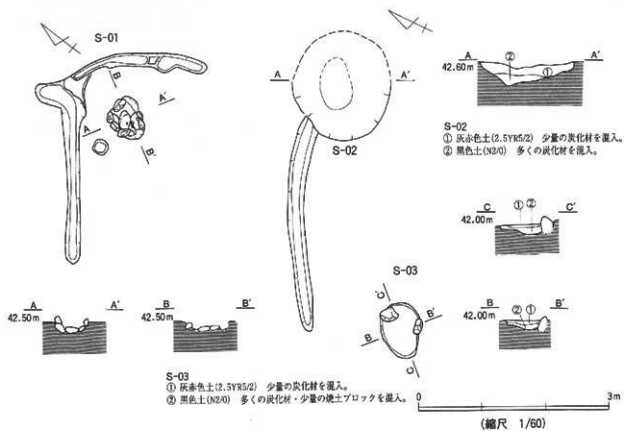
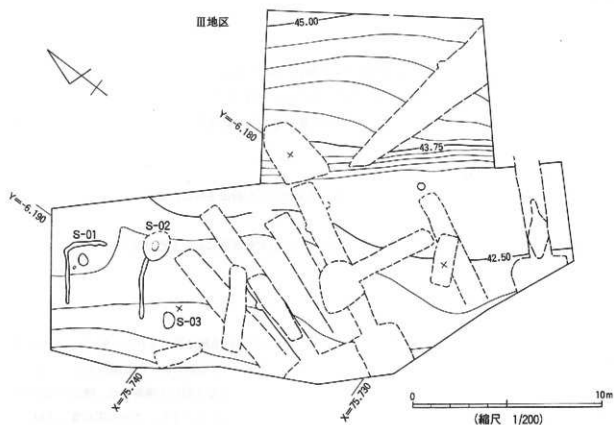
標高42mの南緩斜面にはテラス状の平坦面が形成され、その平坦面の西端部に検出された。S-01の炉は浅い皿状の掘り込みを有し、側壁と底部は礫で囲む鍛冶炉である。炉は楕円形を呈し長軸0.60m、短軸0.45m、深さ0.15~0.20mの規模を測る。石組みは底面に3個の扁平礫を敷き側壁に7個の楕円礫を配して構築され、礫は部分的に黒色に変色している。鍛冶炉の周囲には山側の高位置に「逆L字」形の水切り溝が付帯する。この水切り溝は連続して構築されたわけではなく、北側の中央と籠状に折れ曲がる部分は仕切られている。規模は北側では長さ2.20m、幅0.20m、深さ0.10mであり、西側は長さ2.90m、幅0.25m、深さ0.12mである。なお、炉の西側0.5m地点には径0.22m、深さ0.25mの小穴が確認されているが、当遺構との相互関連の有無は定かではない。

S-02 (第203図・図版第39)

S-01炉の東側2m、テラス状の平坦面に位置する。遺構の掘り下げは炉の南半分と溝であり、炉の北半分は保存とした。炉は楕円形を呈すると考えられ、谷側に緩く曲がるお玉杓子状の溝を付帯し、壁面は上端付近が赤褐色に酸化している。規模は長軸1.70m、短軸1.60m、深さ0.40mの規模を測り、炉の検出面には①層炭化物を含む焼土と最下層には防湿を兼ねた②層炭化物の純層が見られる。溝は長さ3.30m、幅0.25m、深さ0.11mを測り、埋土は少量の炭化物を含む灰褐色土の単層である。

S-03 (第203図・図版第39)

S-02炉の南側3m、テラス状の平坦面から谷部に移行する緩斜面に位置する。炉は楕円形を呈し壁面には割裂した2個の礫が配され、壁面は上端付近が若干赤褐色酸化している。長軸0.90m、短軸0.65m、深さ0.15mの規模を測る。S-02と同様に①層炭化物を含む焼土と最下層には防湿を兼ねた②層炭化物の純層が見られた。(肥田・松田)



第203図 赤坂A遺跡Ⅲ地区遺構配置図 S-01～03炉跡